

日本同時代史学会2011年度大会「越境する知と日本」2011年12月10日（土）午前の部
「マルクス主義と戦後日本の知的状況」11:00 - 13:00専修大学神田キャンパス7号館731教室

日本マルクス主義はなぜ「原子力」にあこがれたのか（ウェブ版）

加藤哲郎（早稲田大学・政治学）

<http://www.ff.iiij4u.or.jp/~katote/Home.shtml>

<報告レジメ>

1 日本の核エネルギー——「まだ70年」か「もう70年」か？

問題の所在 現存した社会主義・ソ連邦（1917-91）崩壊時の討論との類似性・共通性

- ① 1941 日本における原爆開発開始（陸軍・理研仁科芳雄・東大・嵯峨根遼吉・武谷三男ら「二号研究」と海軍・京大荒勝文策・湯川秀樹ら「F研究」）から、2011. 3. 11 フクシマまで、脱原発を決めたドイツとの違い（緑の党の存在）
- ② Transnational にみた、非核Anti-Nuclear 運動の遅れ
——9つの「原発神話」（高木仁三郎）と10の「原爆・原子力」神話（Netizen College 加藤）

・原発神話（高木仁三郎） 『原子力神話からの解放』講談社文庫	原爆・原子力神話(KATO)
①「原子力は無限のエネルギー源」	①ナチス・ドイツへの必要悪
②「原子力は石油危機を克服する」	②早期終戦・犠牲最小化
③「原子力の平和利用」	③唯一の被爆国
④「原子力は安全」	④原子力時代、第3の火
⑤「原子力は安い電力を供給する」	⑤国連・国際管理で平和利用
⑥「原発は地域振興に寄与する」	⑥科学者の良心で統御可能
⑦「原子力はクリーンなエネルギー」	⑦社会主義の核は防衛的
⑧「核燃料はリサイクルできる」	⑧核抑止、原発潜在的抑止力
⑨「日本の原子力技術は優秀」	⑨日本人の核アレルギー
	⑩占領期原爆報道の消滅

- ③ 原水禁運動と原子力基本法の同時出発・別展開、核兵器と原発開発の一体性（1969「わが国の外交政策大綱」、NHK「核を求めた日本」、藤田祐幸・山崎正勝らの科学史研究に照らして、社会科学・歴史学の不作為責任、自称「唯一の被爆国」でなぜ「ヒロシマからフクシマへ」の悲劇が再現したのか？
- ④ 吉岡斉『新版 原子力の社会史』の含意：限定的対米従属の日米原子力同盟、「社会主義的」な二元体制的（科技厅原研動燃/通産電力連合）国策共同体の「核武装スタンバイ戦略」分析＝「三原則蹂躪史観」批判
- ⑤ 日本マルクス主義から、なぜ高木仁三郎・小出裕章が生まれなかったのか——武谷三男の役割と意味、「トロツキスト」水戸巖、「現代修正主義者」池山重朗ら共産党から批判・排除された者の先駆性

2 マルクス主義政党の「原子力の平和利用」の夢と70年後の現実—ソ連評価の変遷との近似性

- ・ 1946 JCP 科学技術部=武谷三男「日本の科学技術の欠陥と共産主義者の任務」[32 テーゼ]からの出発
- ・ 1949 徳田球一「原子爆弾と世界恐慌」(原爆パンフ) cf. 下斗米伸夫『日本冷戦史』
- ・ 1950 コミンフォルム批判、朝鮮戦争(軍事利用も)、党分裂→民科・学術会議 vs 中曾根・正力原発導入
- ・ 1956 原子力は労働者の階級的要求(永田「原子力問題について」)→原水協・被団協→61「原子力決議」
- ・ 1960年代 社会主義の防衛的核 上田耕一郎『マルクス主義と平和運動』vs 加藤『国家論のルネサンス』
- ・ 1970年代 総合エネルギー公社・代替新エネルギーvs75「原爆と原発」、原子力資料情報室(武谷・高木)
- ・ 1980年代 原水禁・「脱原発」運動 vs 「未完成技術」「放射性廃棄物をロケットに積んで太陽にぶちこむ」
- ・ 2011.8 存立条件と綱領変わっても「2,3世紀先の平和的利用可能性」(志位・福島「老舗」対談)

3 社会科学者の夢 平野義太郎の平和利用論と「資本主義の全般的危機」「社会主義=平和勢力論」

- ・ 戦前講座派・戦時大アジア主義・戦後平和運動(1897-1980, 日本平和委員会会長) cf. 労農派有澤広巳
- ・ 1948/4「戦争と平和における科学の役割」=プランゲ文庫で最初の「原子力の平和利用」論文
- ・ 1949/11「資本主義法則と科学技術」民科技術部会『資本主義法則と科学技術』4大矛盾・3大革命勢力
- ・ 民主主義科学者協会、日本学術会議、国民の科学運動、日本科学者会議、平和委員会(84原水協分裂)
- ・

4 自然科学者の夢 「共産党の70年」を凝縮・先取りした伝道師・武谷三男(1911-2000)の10年

- ・ 1946 原爆の反ファシヨ的性格—Transnational 核物理学共同体の偉業と米ソの組織的計画科学
- ・ 1947「原子力時代」啓蒙—共産党科学技術部、羽仁五郎、素粒子グループ、客観的法則性の意識的適用
- ・ 1948「原子力とマルクス主義」→1950 徳田「科学と技術におけるマルクス・レーニン主義の勝利」
- ・ 1952 民科・学術会議・平和利用3原則 「唯一の被爆国・だからこそ」の論理、安全性・許容量
- ・ 1956 未だ原水爆時代、水爆は人類の敵、純粋科学の分裂、ソ連批判、原水禁運動から反公害住民運動へ
- ・ 1976『原子力発電』(岩波新書)序→小国主義・人権主義・市民主義・原子力資料情報室(高木との距離)
- ・

5 戦後日本民衆の「原子力」に託した夢—「悔恨共同体」「無念共同体」と「無謬共同体」の遺産

- ・ 占領期の原理・存立条件の崩壊 社会主義・平和勢力・自律的科学者集団・代替エネルギー・未完成技術
- ・ 残されたもの 原子力基本法3原則と「労働者階級の要求」、しかし「原子力」にイメージされた実体は?
- ・ 「核アレルギー」はあったか? 1920『新青年』以来の「原子力家庭」の夢・恐れと戦時・占領期の連続
- ・ ビキニ水爆被爆・原水禁運動と中曾根予算・正力原子炉段階の「原爆と原発」分岐=55年体制・高成長
- ・ 「夢」の先送りは「科学」たりうるか? 「純粋科学」研究・実験・実用・本格的利用段階の無意味化
- ・ マルクス主義は「悔恨共同体」(丸山真男)に入っていたか? 竹内洋「無念共同体」vs「無謬共同体」
- ・ JCP32年テーゼ、米国OSS42年テーゼ、米国近代化論 vs ソ連ML主義=科学の戦争動員と戦後科学支配
- ・ 溢れる富、自然の征服、ソヴェト権力+電化、科学技術革命論=冷戦型「生産力=破壊力」競争の帰結
- ・ 方法:階級主義、経済還元論、生産力主義、科学主義、「誤りを認め匡す科学者と市民の開かれたNetwork」

(ウェブ版注) 以下に、当日配布した1945-61年の付録資料、もう一人の予定報告者が病欠で報告時間が延長されたため用いたパワーポイントの1961年以降資料、それに当日の討論とその後の調査で収集できた資料を加えて、ウェブ用データベースとする。原水禁森滝市郎の証言、「新左翼」黒田寛一の場合、それに安田常雄教授にコメントされた庶民の生活世界での受容の問題、参考文献などを補足した。

{参考} 加藤「占領下日本の『原子力』イメージ」

<http://members.jcom.home.ne.jp/katote/Occuatom.html>

<付録1 「マルクス主義と原子力」言説の軌跡 1945-61> 「原爆の平和利用」の系譜

● マルクス主義政党の「原子力の平和利用」の夢と70年後の現実——武谷三男とソ連に依拠した原爆・原子力政策、武谷がスターリン批判で離れても綱領的立場として「平和利用」継続＝ソ連評価の変遷に照応

1946.2 『新生』 武谷三男「技術論」

・原爆をつくったアメリカの科学技術は「十分に強力な科学者技術者の組織が存したならば、戦争に対しても極めて有効に阻止する役割」、科学者・技術者は「生来の理性においては合理主義者であり、本質的にヒューマニスト」「組合に協力するならばその効果は絶大」←「技術とは客観的法則性の意識的適用」

1946.6 民科自然科学部会『自然科学』創刊号、武谷三男「革命期における思惟の基準—自然科学者の立場から」(現代日本思想体系25『科学の思想 I』所収、筑摩書房、1964)

・原爆＝反ファッショ「文明」論、「原爆研究の平和利用」論の原型

・「今次の敗戦は、原子爆弾の例を見てもわかるように世界の科学者が一致してこの世界から野蛮を追放したのだともいえる」「原子爆弾をとくに非人道的なりとする日本人がいたならば、それは己の非人道をごまかさんとする意図を示すものである。原子爆弾の完成には、ほとんどあらゆる反ファッショ科学者が熱心に協力した。これらの科学者たちは大体において熱烈な人道主義者である。」

・「原子爆弾は日本の野蛮に対する晴天の霹靂であった。日本の科学者はかかる野蛮に対して追撃戦を行うべきことに責任ある地位にある。しかるに日本の科学者はいまだに何一つその責任を果たしていない」

参考 プランゲ文庫で占領期「原子力」の語り部であった物理学者は? 〈社会科学 平野義太郎 260〉

湯川秀樹 134 (初代原子力委員会委員)	武谷三男 128
渡辺 慧 88 (原子党宣言)	仁科芳雄 68
崎川範行 62	嵯峨根遼吉 37 (長岡半太郎 5 男)
藤岡由夫 37 (初代原子力委員)	田中慎次郎 (朝日新聞社) 32
伏見康治 30	長岡半太郎 23 (日本学士院長)
坂田昌一 17	朝永振一郎 14
茅 誠司 14	武田栄一 13

1946.11 日本共産党科学技術部「日本の科学・技術の欠陥と共産主義者の任務 (科学技術テーゼ)」

「32年テーゼ」をもとに「民主主義革命のための科学技術の計画的・積極的動員」＝①技術の植民地性、②科学の非実験性、③科学技術の跛行性、④技術の非科学性、⑤科学技術の人民の利益への背反、⑥科学方法論の欠如、⑦農業技術の低位、⑧大学及び公立試験研究機関の封建的官僚制、⑨資本主義的研究機関の利潤追求性、⑩軍需資本家による科学技術の独占・秘密化、⑪科学技術者の非社会性、⑫人民生活の非科学性、⑬教育の非科学性とブルジョア性 (武谷三男の執筆? 「科学と技術」理論社、1950.5 付録として『武谷三男著作集』第4巻1969年にも所収、cf. 中村静治『新版 技術論論争史』創風社、1995)

1947.10 『日本評論』 武谷三男「原子力時代」

「われわれ (研究者の一部) が原子爆弾研究をやる事になったのは、日本で原子爆弾をつくるためではなかった。われわれは日本の工業力並にウラニウムの産出高からいって、また日本の科学界の状態からいって、原子爆弾が日本でできない事などは百も承知であった。われわれの考えはまず原子爆弾という事をカン板にする事によって、何とか原子核物理学の研究という純粋な研究が不急なものとして止められる事から救う事

であった」「原子力の解放が科学史上の最大の出来事の一つであり、画期的な業績である事はもはや疑う人もいない」、トルーマン声明は「科学者の頭脳」の「立派な工場化」、「原子爆弾はその最初から反ファッショ科学としての性格を強くもっていた」、アメリカの物理学者たちの「反ファッショ的熱意、人道主義的熱意」の産物、原子力開発には、意識的組織的協力、膨大な工業力の裏付け、国家的規模での統一が必要、「この社会的基礎はアメリカ資本主義の胎内において自然的に強力に発達してきた労働者の組織の民主主義的原動力であった」{←羽仁五郎「科学と資本主義」『中央公論』47.6、マルクス『資本論』の機械制大工業論}レーニン「ソヴェト建設において電化の役割の決定的なる事」「原子爆弾が将来の戦争防止の有力な契機」

1948.4『中央公論』平野義太郎「戦争と平和における科学の役割」

- ・科学の成果は人間の用い方いかんで平和にも戦争にも使われる
- ・プランゲ文庫検索では、戦後日本で初めての「原子力の平和利用」をうたった社会科学論文

1948.6『思索』武谷（野間宏対談）「現代知識人の立場」

「世界の原子科学者は平和を熱望しているし、また平和のために原子爆弾を造り上げた」「原子力時代になってきたら、これは相当大きな勢力になる」

1948.7『社会』武谷「原子力とマルクス主義」

・原子力はマルキシズムの否定ではなく、むしろマルキシズムをよりはっきりと理解させるもの、「原子力は悪いように使える代物ではない。必ずいいようにしか使えない代物である。人類が、すべて生の本能を持っている限り、人類絶滅の道具として使用することはあり得ない。道徳の問題としてでなく、ザインとしてそういう事はあり得ない」「科学の限界という考え方が、現在まで進歩的な唯物論者といわれる人の間にもなお残っている」「ザインの地盤からゾルレンがザインの自己発展として出てくる。そういうのがマルキシズムの見方である」「ソヴェト体制下では、科学は資本主義体制下の科学とは違うかたちで発展している。資本主義の下では科学はある制約のもとにしか発達しない。実際は原子力の平和的利用はほとんど無視されている」「社会はつねに人民の圧力によって推進（羽仁五郎）」「資本主義が科学を発達させたというが、それは資本が発達させたのではなく、人民の圧力の関係においてのみ科学は発展する」ソヴェトは科学者に莫大な援助、必要な研究費はいくらでも要求すればとれる、科学者・技術者が優遇されその次が労働者、官吏はかえって悪い待遇、労働の安全性について組合の力はすばらしい、そのことはさまざまなソヴェト抑留者の手記に書かれている。学問の自由はソ連において真に守られている」

1948.11『子供の広場』武谷「原子力のはなし」

「原子爆弾は、原子力を利用したものであるが、それが平和のきっかけをつくってくれた」「原子力は爆弾としてだけではなく、平和なしごとのうえで、これからうんと利用されるにちがいない」「原子爆弾の製造は、アメリカのような大工業の基礎があってはじめてできる」、自動車、飛行機、家庭暖房、炊事にはむかない、ウラニウムの連鎖反応必要量と放射能の問題があり「ふつうの小さな動力源としては使えない」「原子力を利用すれば、シベリアのひろい野原や砂漠のまんなか、大洋のなかの島々のように、動力源がふべんなためにいままでひらけなかった地方も、ひらいてゆける」アメリカでは5年以内に実用化、「自然力がまちがってつかわれると人類はほろびるが、ただしく使われると人類の生活をどんどんたかめることができる」
(1949.8.29 ソ連原爆実験成功)

1950.1『新しい世界』徳田球一「原子爆弾と世界恐慌」（原爆パンフ＝「原爆の平和利用」論）

「なぜ資本主義では原子力は平和的に使えないか、なぜソ同盟では平和的につかえるか」「原子爆弾と共産主義」＝武谷の「原爆研究の平和利用」から一步飛躍し「原爆の平和利用＝開発力・抑止力」へ

・1949年1月総選挙で共産党35議席の大躍進、夏に下山・三鷹・松川事件、10月1日毛沢東の中華人民共和國建国宣言、その直前にソ連初の核実験成功(8月29日)発表。すでに志賀義雄「原子力と世界国家」(日本共産党出版部『新しい世界』48年8月)等で「社会主義の原子力」の夢を語っていた共産党は、「光から生まれた原子、物質がエネルギーに変わる、一億年使えるコンロ」(日本共産党出版部『大衆クラブ』49年6月号)とボルテージをあげる。その頂点が、この頃流布した日本共産党書記長徳田球一の「原爆パンフ」である。「原爆パンフ」とは、『新しい世界』1950年1月新年号に掲載された徳田球一「原子爆弾と世界恐慌を語る」という49年11月18日談話、スターリンの70歳誕生日直前である事に注意。すぐに『原子爆弾と世界恐慌』(永美書房、国会図書館なし)という政治パンフレットになり、労働組合活動家やレッドパージで職を失った人々の間で広く読まれた。「なぜ資本主義社会では原子力を平和的につかえないか、なぜソ同盟では平和的に使えるのか、原子爆弾と共産主義、原子爆弾は最大の浪費である」と歯切れよく「社会主義の核」の優位を説き、今日まで続く左翼版「原子力の平和利用」(ならぬ「原爆の平和利用」論、第1に荒野開拓・大規模開発技術、第2に資本主義の核への抑止力)の原型となった。

(徳田「原爆パンフ」の内容←武谷三男の影響、1949.11.10 ソ連邦国連代表ヴィシンスキー第4回国連総会演説「われわれがソ連邦で原子力を利用するのは、原子爆弾の蓄えを増やすためではない。…われわれは、われわれの経済運営計画に沿って、われわれの経済・経済運営上の利害において原子力を利用しているのである。われわれは原子力を、平和的建設の重要課題実現に役立てることにしており、われわれは、山を砕き、河川の流れを変え、荒野を灌漑し、人間がめったに足を踏み入れたことのない場所でさらに新しい生活の路線を切り開くために原子力を役立てるのである」の影=広島大市川浩教授のご教示)

・徳田「独占資本主義のもとでは原子力は「動力源としては使えず、爆弾としてしか使えない」、なぜなら原子力を動力源にすると資本主義は生産過剰になり世界恐慌に突入する、それに対して社会主義のソ連では、平和産業が発展する。」

・原爆で「おおきな河を逆の方向に流れさすとか、大きな山をとっばらって」「これまで不毛の地といわれたひろい土地が、有効に使われる」(cf. 45年米国では「人工地震」計画、占領期日本では仁科芳雄らの「台風の進路を変える」夢)、そこに「ミチューリンの方式で、新しい作物をどしどし適応させてゆく。そうすると、生産力の飛躍的な拡大となる。蒙古でもゴミの砂漠でも、新疆でも、ヨーロッパの文明圏の何倍もあるような不毛の土地が、原子力のおかげで、緑のしたたるような、ゆたかな沃野にかわっていく」

・「原子力を動力として使えば、都市や工場のあらゆる動力が原子力で動かされ」冷暖房自在で「飛行機、船舶その他ありとあらゆる動力として、つかえる」「そうすると、生活必需品も、物質の洪水みたいに、ありあまるほどつくれる」。

1949. 10. 26 民科学技術部会講演 徳田球一「科学と技術におけるマルクス・レーニン主義の勝利」も同様の内容(民科学技術部会編『資本主義法則と科学技術』真理社、1950) =平野義太郎「資本主義法則と科学技術」、武谷三男「原子力産業と科学技術の行方」と一緒の連続講演記録、平野は唯物史観の「資本主義の全般的危機」法則=「4大矛盾・3大革命勢力」論から、徳田は「先ほどの武谷先生の話」を受けて語る。

1949, 11. 7 『アカハタ』 徳田球一「ロシア革命32周年を迎えて」

1949. 12. 1 『前衛』44号 徳田球一「スターリンの70回誕生日に際して」

1949. 12. 14 『アカハタ』 徳田球一「スターリンの70歳誕生日を祝う挨拶」

(参考) 加藤「占領下日本の『原子力』イメージ」2011. 10 早稲田大学での講演記録より抜粋
「原子力の平和利用」に託されたさまざまな「夢」

原子力へのあこがれは、原子力発電ばかりではなかった。自動車・機関車・船・飛行機など交通手段の動力として、「機関車も燃料いらず、平和の原子力時代来れば」(『九州タイムズ』1946年11月27日)、「月世

界・金星旅行の夢ふくらむ、今日原子力の記念日」(『西日本新聞』46年12月3日)と夢は広がる。

ラジウム療法などは戦前から知られていたから、「原子力の医学的利用」(『海外旬報』46年6月10日)、「平和のための原子力時代来る、新ラジウム完成す、安価にできるガンの治療」(『京都新聞』48年8月8日)はもとより、「お米の原子力時代」で農業増産(『生活科学』46年10月)、「農民の夢、原子力農業」(『明るい農家』49年6月)、はては「農家を悩ます颱風の道、原子力で交通整理」と原子爆弾で台風の進路を変えることさえ夢見る(『中国新聞』46年7月26日)。寒冷地北海道の科学普及協会『新生科学』48年12月号は「科学の目：近く原子力暖房」という具合である。

つまり原子力は、敗戦・復興期の日本人の夢だった。それは人類史を画する新しい時代とされた。『科学の友』1949年3月号の「進歩してきた人類の文化」は、旧石器時代・新石器時代・青銅器時代・鉄器時代から始まり、フランス革命時代・産業革命時代・大戦時代を経て、ついに「原子力時代」に到達する。

ヒロシマと共に原爆を経験したナガサキでも、「平和にのびる原子力、破壊→幸福の力→建設、驚異・300倍の熱量、航空機・自動車・医療へ実用化」と長崎原爆記念日に語られる(『九州タイムズ』49年8月9日)。「平和のために闘う原子力」は『科学画報』49年4月にあり、「原子力は第2の火、人間は別種の動物に進化」(『長崎民友』49年1月1日)と讃えられ、原子力は「歴史を進める」主体、「文明」「進化」「進歩」の象徴となった。

労働組合も共産党もソ連原爆実験成功で「社会主義でこそ平和利用」

当時の華やかな労働運動のなかでも、たとえば全通信労働組合広島郵便局支部の機関紙は『アトム』と命名され(1947年9月20日)、国鉄労組東京鉄道教習所『国鉄通信教育』48年12月号は「第2の火の発見——原子力時代」を「教養」欄で論じる。宇部セメント労働組合青年部の機関誌創刊号が『原爆』と名付けられたのは(49年3月1日)、「原爆を神風にする道」(『北日本新聞』49年8月6日)が唱われた時代であるから、強力な闘争の意であろうか。北越戸田労働組合の機関誌『暁星』にもコラム「原爆室」がみられ(48年9月5日)。左翼・革新勢力ほど、「原爆アレルギー」にはほど遠いようだ。

特に1949年は、1月総選挙で共産党35議席の大躍進、夏に下山・三鷹・松川事件、10月1日毛沢東の中華人民共和国建国宣言、その直前にソ連初の核実験成功発表である。すでに志賀義雄「原子力と世界国家」(日本共産党出版部『新しい世界』48年8月)等で「社会主義の原子力」の夢を語っていた共産党は、「光から生まれた原子、物質がエネルギーに変わる、一億年使えるコンロ」(日本共産党出版部『大衆クラブ』49年6月号)とボルテージをあげる。その頂点が、この頃流布した日本共産党書記長徳田球一の「原爆パンフ」である。

「原爆」「原子力」を中性化する「アトム」「ピカドン」は漫画や物語に

しかしまだ、「原爆」や「原子力」の言説クラウドでは、「原子力戦争は人類の破滅」(『週刊東洋経済』1949年4月24日)、「原子力と共産党員、使途は平和か武器か」(『九州タイムズ』49年2月25日)、「天国の裏は地獄である、我々は何れを選ぶか」(『農民クラブ』49年6月)、「ソ連の原子爆弾で戦争の危機緩和か、原子爆弾に使われる危険」(『週刊東洋経済』49年10月)などと「原爆の裏面の平和利用」への留保があり、危惧もされる。占領軍GHQの検閲はあらゆる出版物に及び、原爆を落としたアメリカへの批判や広島・長崎の放射能被害の継続・晩成被害は隠蔽される。「ソ連に原爆と殺人光線」といった記事は検閲され(『京都新聞』48年3月11日)、逆に「広島・長崎の原爆放射能消滅」というAP電はフリーパスになる(『北日本新聞』48年10月8日)。

ところが、「ピカドン」「アトム」とカタカナになると、あまり抵抗感なく受け入れられたようだ。カタカナの魔力は、「ピカドンと婦人、広島病院のお答え、不妊の心配なし、奇形児も生まれませぬ」(『中国新聞』1946年7月10日)などと使われ、『佐世保時事新聞』48年8月2日は、原爆記念日を前に「アトムの街々」特集を組み、「広島と長崎、それは原爆の地として世界注視のうちに新しい平和を求めて起つところ、人類に原子力時代到来を願って今こそ戦後の世界復興を」と訴える。

広島・長崎を「アトム都市」とする記事は47年から現れ、47年12月の昭和天皇の広島行幸は、「お待ち

するアトム広島（『九州タイムズ』47年12月1日）、「ピカドン説明行脚、天皇がアトム広島に入られた感激の日」（『中国新聞』47年12月11日）のように使われる。48年の長崎原爆記念日は、「祈るアトム長崎、3周年記念、誓も新た平和建設」と報じられた（『西日本新聞』48年8月10日）。爆心地は「浦上アトム公園」と命名され（『熊本日日新聞』48年8月10日）、「アトム公園を花の公園に」とよびかける（『長崎民友』49年3月24日）。

これがこどもたちの世界では、原子力をエネルギーとするロボットや怪物に化身する。「アトム先生とボン君」（『こども科学教室』（1948年5月1日）、中野正治画「ゆめくらぶ・ミラクルアトム」（『漫画少年』48年8月20日）、和田義三作連載マンガ「空想漫画絵小説：アトム島27号」（『冒険世界』49年1月1日）、原研児「科学冒険絵物語 アトム少年」（『少年少女譚海』49年8月1日）と、ほとんど無防備で「夢の原子力」へと一直線にワープする。かくして手塚治虫「鉄腕アトム」（「アトム大使」1951年）の出現は、時間の問題だった。

ヒロシマ「あとむ製薬」の滋養強壮薬「ピカドン」

プランゲ文庫「占領期新聞雑誌データベース」では、広告欄と広告文も拾われている。『愛媛新聞』1949年1月13日広告に、「あとむ製薬」から「ピカドン」という薬も売り出されていた。調べて見ると、「あとむ製薬」は、1948年広島市安芸区に設立された薬種会社で、その後も社名を変えて今日まで存続している。その社史によると、「あとむ製薬」は、もともと漢方薬から出発しており、「ピカドン」は新発売の滋養強壮剤だった。

しかも「ピカドン」は、中国・四国地方の専売特許ではなかった。ウェブ上の「お薬博物館」には、「あとむ製薬」とは別の富山県黒部産「風邪にピカトン」という置き薬（1包40円）が写真入りで収納されている。富山市電子図書館にも、「かぜに新ピカトンM（Ueshima 製薬所）」とあり、同一であるかどうかは確認できない。



いずれにしても、朝鮮戦争期の日本には、「ピカドン」（「ピカトン」であっても包み紙から瞭然）という薬が、広島と富山から発して、当時は普通に見られた富山の薬売りの行商を通じて全国に流通し、家庭に入ったことになる。1945年に広島・長崎市民の生命を一瞬にして奪った原爆が、5年もたたずに、その強力なエネルギーゆえに日本人の健康を守り強壯にしてくれるという、免疫作用のアナロジーである。50年代に人形峠でウラン鉱脈が見つかる、「ウラン風呂」から「ウラン野菜」「ウラン饅頭」まで出現する前兆である（武田徹『私たちはこうして「原発大国」を選んだ』中公新書、2011年）

1950. 1. 18 JCP 第18回拡大中央委員会報告 いわゆる「コミンフォルム批判」を受けての自己批判

「ソ同盟における原子力の確保は、社会主義経済の偉大な発展をしめすとともに、人民勢力に大きな確信をあたえ、独占資本のどうかつ政策を封殺したこと。原子力を動力源として適用する範囲を拡大し、一般的につかえるような、発電源とすることができるにいたったので、もはやおかしことのできない革命の要さいであり、物質的基礎となった。」

1950. 4. 26 拡大中央委員会書記長一般報告草案に対する意見(志賀意見書、いわゆる国際派の所感派批判)
志賀義雄「ソ同盟が原子力を保持したことをとりあげて革命の要塞を強化したというが、そこにはソ同盟が世界の恒久平和の最大の保持者であることは全く認められていない。だから、それにはブルジョア原子力外交のうらがえしを認めるだけで大衆の目をそらせソ同盟をも戦争の立役者にしたてる印象を与える。

1950. 4. 26JCP「当来する革命における日本共産党の基本的任務について」草案

「ソヴェト同盟において原子力の運営が卓越し、アメリカをびっくりさせ、彼等を水素爆弾の製造その他新しい武器の製造の宣伝に熱中」させている

1950. 7. 5JCP「戦争の危機に際して全人民に訴う」 (→国民の科学、国民の歴史学運動)

「われわれは、戦争によって最も悲惨な経験をなめた国民であり、原子爆弾の犠牲になった唯一の民族である！ 広島と長崎では一瞬のうちに19万4千の同胞が死に、数十万の人々が不具者となった。この恐るべき惨禍をふたたびくりかえさないために、この平和投票[ストックホルム世界平和評議会アピール]に参加することは戦争に生き残ったわれわれの任務である。すべての愛国者は、平和のための投票を」

1952. 4 独立：吉田茂の「科学技術庁」構想(前田正男)、日本学術会議「茅・伏見私案」否決＝「日本の科学者が、原子力について真剣な討論を交わしたほとんど唯一にして最後の機会」(藤田祐幸)

1952. 8 『婦人画報』武谷「原子力を平和的に使えば」

・「キュリー夫人、ジュリオ・キュリー夫人、マイトナー女史、このような平和主義的母性の名をもって象徴される原子力、

・「原子力発電では、少量の原料で大発電ができる」「北極や南極のような寒い地方、絶海の孤島、砂漠などが開発され、そういう地方にも大規模な産業がおこなわれ、大都市をつくることができる。ロケットで地球外にとぶだすこともできる」「とくにソ連やアジア大陸のように大規模な自然を持つ土地では、土地改良に原子力が大きな役割を果たすことが期待される、すでにソ連では原子爆発で山を吹き飛ばし、川の流れをかえたということもいわれている、日本などでも電力危機は完全に解消されるだろう。そして電力をもっと自由に家庭に使用することができる。今日の日本の一般家庭では電灯とラジオ位にしか使われていないが、台所の電化はもちろん、暖房、冷房、洗濯、掃除もすべて電力で行われることになるだろう」、農業には大規模温室、太陽灯でいつでも新鮮な野菜、アメリカは「武器にばかり熱心で、平和的利用にあまり力を注がない」「ソ連は原子力の利用に非常に熱心なので、おそらく10年もすれば可能、原子力の副産物の放射能も「化学変化の研究や医学に」、デンプン人口合成も、「きっと近いうちに肥った人がやせたり、やせた人が肥ることも自由になるだろう」「皮膚を美しくするような化粧法」

1952. 11 『改造』武谷「日本の原子力研究の方向」(加納実紀代のいう「だからこそ」の論理)

・「日本人は原子爆弾を自分の身に受けた世界唯一の被害者であるから、少なくとも原子力に関する限り、もっとも強力な発言の資格がある。原爆で殺された人々の霊のためにも、日本人の手で原子力の研究を進め、しかも人を殺す原子力研究は一切日本人の手では絶対行わない。そして平和的な原子力の研究は、日本人がこれを行う権利を持っており、そのためには諸外国はあらゆる援助をなす義務がある」

・民主・自主・公開3原則「日本で言う原子力研究の一切は公表すべきである。また、日本で言う原子力研究には、外国の秘密の知識は一切教わらない。また外国との密接な関係は一切結ばない。日本の原子力研究のいかなる場所にも、いかなる人の出入りも拒否しない。また研究のためいかなる人がそこで研究することを申し込んでも拒否しない。以上のことを法的に確認してから出発すべきである」→学術会議決議→原子力基本法 (「だからこそ」の愛国主義的論理が、「国民の科学」運動と連動しているか?)

1953. 12 アイゼンハワーAtoms for Peace 演説、54. 3 ビキニ水爆被爆、中曽根予算、4 月学術会議で原子力平和利用3原則

1953. 4 民科物理学部会『季刊理論別冊 日本の原子力問題』（理論社）当時の科学者たちの理解の集大成

1953. 8. 21 『北海タイムス』武谷「ソ連の水爆実験を聞いて——戦争はこれからやりにくくなる」

・「原爆と違って水爆は戦争以外に全く役立たない」→アイゼンハワーAtoms for Peace 提案、茅・伏見提案への反対、「水爆は人類の敵」、この原爆と水爆の区別、「死の灰」体験が武谷の「転向」の出発点になる

1954. 3. 13 『読売新聞』武谷「ガラス張り原子力憲章を」

・「原子力の平和利用は重要であり、その時期がせまっていることもたしかである。しかし日本でそれを利用するには、まだ10年間は準備の余裕がある」

1954. 3. 29 『新潟日報』武谷「不明朗な原子炉予算」 原子力のマーシャルプラン

1954. 3. 30 『日教組教育情報』武谷「ビキニ被爆事件について」水爆のエネルギー、死の灰は予想以上

1954. 8. 8 『中国新聞』武谷「原子力発電の意味するもの」

・「原子力発電は原爆や水爆の製造技術や企業とは、桁違いに高級かつ困難な代物であり、現在その幾多山積している難問はまだほとんど未解決」、「死の灰の処理」は容易ではない

1954. 11 『前衛』杉村敏夫「平和と民族独立のとりでソヴェト社会主義共和国同盟一大十月社会主義革命 37周年にあたって」

・「平和のための、原水爆禁止のための何億という人民の大運動」「今年の（ソ連）原子力発電所の建設と操業の発表ほど、世界の平和と民主主義と社会主義の事業に大きい奉仕となったものはない」

1954. 7 民科自然科学部会共同デスク『死の灰のゆくえ』（蒼樹社、第5福竜丸）

1954. 8. 30 民主主義科学者協会歴史部会編『世界歴史講座』最終第6巻、鳥居広「現代と原子力」

1954. 10 民科共同デスク『死の灰から原子力発電へ』（蒼樹社）

1955. 2 林克也『未来をつくりだす原子力』（青木新書、ソヴェト原子力の勝利）

1955. 1. 1 正力＝読売新聞・CIAの原子力平和利用キャンペーン、大演説会、博覧会

1955. 4 E. H. S. バーホッフ『原子力の挑戦』（中央公論社）世界平和評議会評議員、ロンドン大学

1955. 10 陸井三郎・野中昌夫編訳『ソヴェトの原子力』（三一新書、1955. 10）平和利用の実際、安全な原発

1955 J・アレン『原爆時代から原子力時代へ』（理論社）世界はまだ原爆時代、真の原子力時代へ

1955. 4. 9 世界平和評議会ストックホルム特別総会「原子力委員会の声明」（『前衛』1956. 7）

「人類の希望は原子力の利用によって非常に大きくなりましたが、同時にまた恐怖も非常に大きくなりました。原子力利用のための科学者の努力と物的資源の大部分がなんと戦争の準備のためにそそぎこまれている。原子兵器競争が続いている間は研究や平和利用の分野でのどんな試みも妨げられるでしょう。恐怖から解放された世界において、原子力の建設的利用を実現するようになることは、まさにすべての諸国民の仕事であります。」

1955. 7. 28 日本共産党第6回全国協議会（6全協）「平和を求め、原子戦争に反対」

1955. 12 原子力基本法成立

1955, 8 第一回原水禁大会：武谷演説「現在の原水爆時代を克服しない限り、原子力時代は訪れない」

1956. 1 原子力委員会設置(初代委員長正力松太郎、石川一郎・湯川秀樹・藤岡由夫・有澤広巳委員)

1956. 6 日本原子力研究所が茨城県東海村に設置。

(参考) 森滝市郎の証言 (『核絶対否定への歩み』 溪水社, 1994より、以下同)

<http://www.gensuikin.org/data/mori1.html>

1955 原発の贈り物

私が広島で原発の問題にもろにぶつかったのは、一九五五年(昭和三十年)の一月末であった。

一月二十八日(金)の日記「・・・夜、原水禁広島協議会常任理事会。・・・イエーツ米国下院議員が広島に原子力発電所を建設すべしとの提案をなした、との報道が今朝の新聞・ラジオで行なわれたのでこれに関して熱心な討議。結局、市民に問題点を明示する声明書を出すこととなる。起草委員は渡辺、森滝、佐久間、田辺、迫。」

一月二十九日(土)の日記「中国新聞に昨日、私がただ一言『うかつに受け入れてはならぬ』と原子力発電所について記者の問いに答えたことが大きくとりあげられていた。午前、渡辺文学部長の部屋に起草委員が集まり、原子力発電所問題についての声明書をつくり、午後、報道関係の人々を集めて発表。」

一月三十日(日)の日記「昨日の声明書が各新聞の三面に報道された。米国にもはっきり伝えられるであろう。・・・」

この声明の原文はいま探し出せないのが残念であるが、中国新聞に載った声明要旨は以下の通りである。原子力発電所装置の中心となる原子炉は、原爆製造用に転化される懸念がある。原子炉から生ずる放射性物質(原子核燃料を燃焼させて残った灰)の人体に与える影響・治療面の完全な実験が行なわれていないため重大な懸念がある。平和利用であっても、原子力発電所の運営に関してアメリカの制約を受けることになるさらに、もし戦争が起こった場合には広島が最初の目標になることも予想される。原爆を落とした罪の償いとして広島に原子力発電所を設置するということもいわれているが、われわれは何よりも原子病に悩む数万の広島市民の治療、生活両面にわたる完全な補償を行なうことを要望する。

この声明書を見た浜井市長は、困惑と失望を隠さなかった。出会いがしらに私に言った。「新聞であの声明書を見たときは『しまった!』と思いましたよ。マイク正岡は、本当に善意であるそこまで運んでくれたのに」と。浜井市長の新聞談話には「原子力平和利用は一昨年から私が米国によびかけていたもので、とくに昨年渡米したときマイク正岡氏にも頼んだ。彼の熱心な運動が実を結んだのだと思う。しかし微量放射能による悪影響が解決されない限り平和利用はあり得ない。いずれにしても原子力の最初の犠牲都市に原子力の平和利用が行なわれることは、亡き犠牲者への慰霊にもなる。死のための原子力が生のために利用されることに市民は賛成すると思う」と。

イエーツ議員が一月二十七日下院に提出した決議案の趣旨説明も、「広島に原子力発電所を建設しようとの提案は昨年九月、政府原子力委員会のマレー委員によってなされたもので、その目的は、人間の発明を死のためではなく、生のために使うよう努力すべきだ、とのアイゼンハワー大統領の提唱を実現しようとするためにある」と。生のための善意の贈り物と信じたい。しかし、浜井市長が心配した微量放射能の問題は、あれから四半世紀経た今日もなお解決していない。

1956. 5-6 広島平和利用博

翌一九五六年(昭和三十一年)には「広島原子力平和利用博覧会」(五月二十七日～六月十七日)が開催されて、私たちは、またしても「平和利用」問題にぶつかった。

アメリカが全世界に繰りひろげていた原子力平和利用博覧会は、すでに開催地二十六ヶ国におよび、観覧者は一千万人を突破していた。日本では東京、名古屋、京都、大阪の会場で百万人近い観覧者をのみこんで

いた。それがいよいよ広島に来るというのである。被爆者の小さな反発のつぶやきはなんともなるものではなかった。しかし原爆資料館の陳列品を撤去して、そこを会場として使用するということに対しては反発せざるを得なかった。

二月五日（日）の日記「・・・被爆者連絡協議会世話人会。三月初旬に県内の大会。原子力利用博に原爆資料館を使用することに反対・・・」

二月十日（金）の日記「・・・夕方、市長（渡辺氏）と原爆資料館の資料持ち出し（利用博のため）につき話し合う。持ち出しは不見識であることに市長も共鳴。しかし、いまとなつては財政上、資料館を使用せざるを得ざる段階なりと」

四月二十五日（水）の日記「・・・アメリカ文化センター館長フツイ氏よりアメリカ政府の回答を受け取る。三月一日のビキニ二周年集会の決議により、米英ソ三国首脳に送った水爆実験中止要請の手紙への返事。日本政府への回答と内容はほとんど同じ」

その頃、アメリカ文化センターは、広島ではアメリカ大使館の出先機関の任務をもっていた。私は、この回答の手紙を受け取ったあと、フツイ館長に対して、原子力利用博の会場のために、原爆資料館の陳列品を持ち出すべきでないこと、被爆市民の感情をよく考慮すべきことを諄々と説いた。

私は遂に、「私があなただったら、そんなことは絶対にしない」と、かなり語気強く言った。すると、フツイ館長もひらきなおって言った。「私は『平和利用！』『平和利用！』『平和利用！』で広島を塗りつぶして見せます」と。

その後、広島市当局は、条例からいっても、原爆の資料展示は会期中も中止できないという理由で、会期中は基町の中央公園に移すという糊塗策をとった。

五月二十五日（金）の日記「中国新聞の招請で原子力平和利用博覧会の下見をする。評を求められて、原子炉のいわゆる『灰』（放射性物質）の処理法が示されていない点を指摘す」

ともかくも広島原子力平和利用博覧会は、アメリカ文化センター、広島県・市、広島大学、中国新聞社の共催で五月二十七日に華々しく開催し、反響は大きかった。会期終了後、人気を呼んだマジック・ハンドや、あらゆる型の原子力発電所や原子力船の模型は、そのまま原爆資料館に寄付され、何年間か資料館に陳列されていた。原子力は戦争に使われたらこんなに悲惨だが、平和利用の未来はかくもすばらしい、ということがひとめでわかるように。

しかし、あのとき、私が原子炉の「灰」の処理方法が示されていない、と評したこの問題は、四半世紀後の今日も未解決の「放射性廃棄物の究極的処理」の問題として人類に迫ってきているのである。

1956 被団協の創立宣言

米国から広島に原子力発電所の贈り物という話が出た一九五五年（昭和三十年）は、あの感動的な第一回原水禁世界大会が広島で開催された年である。

この大会では広島・長崎の原爆体験が初めて広く伝わり、原水爆禁止と被爆者救済の運動の出発点となったが、原子力の「平和利用」も「原発」も話には出なかった。ただ鳩山首相のメッセージだけが「平和利用」に言及した。松本副官房長官が代読した首相のメッセージはいたって簡単であった。いわく「本大会に外国から多数参加され敬意を表します。原子力が人類の福祉のために使用されることを祈ります。本大会の成功を祈ります」と。しかし、原水爆の禁止や核実験の禁止については一言も触れなかった。

「原子力平和利用博覧会」が広島で開催された一九五六年（昭和三十一年）は、第二回原水禁世界大会が長崎で開かれた年である。さすがにこの大会では「平和利用の分科会」が設けられた。しかし、そこには「平和利用」否定の意味は微塵（みじん）もなく、「平和利用」は民衆のためのものであるべきであり、独占大資本のためであってはならぬ、という警告的な発言が多かっただけである。例えばイタリア代表のキャサディー氏は、「平和のために利用される原子力は、巨大な独占利潤を増加させるために使われるのではなく、すべての労働者がより多くのパンとより高い生活水準と、よりよい健康と安定した完全雇用と、より多くの自由

と幸福を実現できるように社会の共有財産となることを望む」と述べた。ルーマニアのノヴァク教授も平和利用は民衆のためのものでなければならぬ旨を伝えた。

鳩山首相は長崎の大会にもメッセージを寄せたが、前回と同様に、原水爆禁止に触れることなく平和利用のみをうたった。いわく「原子力が世界平和と人類の幸福のために善用されることを切望する」と。日本学術会議の原子力平和利用の三原則の「民主・自主・公開」が平和利用の前提であることは、この大会で国際的に認められた。

「平和利用」という言葉は、このように日本の原水禁運動の初期から突きつけられたが「民主・自主・公開」という用心のカベが設けられただけで、一般には「平和利用」のバラ色の未来が待望されていたのである。原子力の「軍事利用」すなわち原爆で、あれだけ悲惨な体験をした私たち広島、長崎の被爆生存者さえも、あれほど恐るべき力が、もし平和的に利用されるとしたら、どんなにすばらしい未来が開かれることだろうかと、いまから思えば穴にはいたいほど恥ずかしい空想を抱いていたのである。

長崎での第二回世界大会のなかで結成された日本被団協の結成大会宣言には「世界へのあいさつ」というサブタイトルがつけられていた。世界に向かって被爆者の思いのたけを述べたものであったが、その結びに近いところで、「私たちは今日ここに声を合わせて高らかに全世界に訴えます。人類は私たちの犠牲と苦難をまたとふたたび繰り返してはなりません。破滅と死滅の方向に行くおそれのある原子力を決定的に人類の幸福と繁栄の方向に向かわせるということこそが、私たちの生きる限りの唯一の願いであります」と。しかも草案を書いたのは私自身だったのである。

1955.9『エコノミスト』武谷「『原子力時代』への考え方」

・原子力発電は「まだ基礎研究の段階」で、「現在はまだ原水爆時代」。安全性、許容量、これから10年実験研究、さらに10年実用試験、「本当に経済的に実用的な意味」は20年後。

56年1月に原子力委員会設置初代委員長正力松太郎、2月スターリン批判、5月広島平和利用博覧会、6月日本原子力研究所開設

1956.7「『前衛』永田博「原子力問題について」

・中央メーデーで「原水爆禁止」と共に「原子力の平和利用促進」のスローガン採択。「労働者が原子力の平和的利用に一步ふみきったことは、原子力の研究、利用、開発がいま、鳩山内閣の計画によっておこなわれているとはいえ、労働者自らがそれになりたい積極的な意志を發表し、行動しようとして決意したことを意味する。労働者階級がそのメーデースローガンとして原子力の平和利用促進をとりあげたのは、このような反動勢力の膨大な夢のような宣伝の結果よりも、労働者階級みずからの諸経験、たたかひの成果として、その必要を感じたためといわなければならない。」第一に、「国際的なたたかひの成果。とくに原子力に関しては、一つは平和勢力の中心となっているソ同盟が原水爆をもち、最終兵器ともいわれる水素誘導弾を完成しようとしている事実が、帝国主義者の原子戦争挑発をためらわせている」「ソ同盟における原子力平和利用の飛躍的發展が、アメリカ、イギリスを追いこし、ソ同盟をのぞいては、原子力平和利用を語るができなくなった」第二として「わが国にも、このような国際的な平和の力にそう国内の平和勢力がしだいにきずかれて強くなっている」「原子力についていえば、原水爆禁止にたいする国民の行動の統一、その世論は、なお、弱点はあるにしても、もはやゆるぎないものとなっている。」「日米原子力協定、原子力基本法についても、わが国の自主性、研究の民主的自由を主張し、鳩山内閣をして譲歩させている」「ここからして、原子兵器が全面的に禁止され、鳩山政府が打倒されるまでは、わが国における原子力平和利用の問題は、実際に問題になりえないといった機械的な態度をとることは許されない」

・55 共産党六全協—56 スターリン批判・ハンガリー民衆蜂起—民科全国活動停止・武谷三男離反

- ・56 原水禁大会決議・分科会、被団協結成宣言への「原子力の平和利用」明記
- ・再建日本共産党の綱領討論・決定への方向付け（社会党・総評も「平和利用」促進）

1956. 10 『科学画報』 武谷「二つの世界と二つの科学」ソ連の唯物弁証法と称するものにもお門違いが
 1957. 1 『世界評論』 武谷「大国と小国と平和と」ハンガリー事件でソ連批判、小国主義・人権主義の立場へ

（参考）武谷三男の立場の変遷

- ① 武谷三男は、敗戦直後から日本共産党の科学技術政策に関わり、原爆の「反ファッショ的性格」から「原爆研究の平和利用」を説き、徳田球一・志賀義雄ら党幹部の原爆・原子力観（「原爆の平和利用」）にも大きな影響を与えた。「原子力時代」「原子力の平和利用」論の論点を先取りし、政策的根拠を提供し、しかも占領期論壇における「原子力」専門家として党外でも大きな啓蒙的役割を果たした。坂田昌一・伏見康治と共に民主主義科学者協会の「原子力の平和利用」観をまとめあげ、湯川秀樹・朝永振一郎らとの架け橋になり、公選制の日本学術会議で「三原則」を採択する上で決定的役割を果たした。
- ② しかし自分自身は、日本共産党の分裂、核物理学者共同体の分裂（特に伏見康治の民科離反と茅誠司・藤岡由夫への接近）、実際の原子力予算・原子力基本法運用に失望し、ソ連の水爆実験・放射能汚染拡散以後、スターリン批判とハンガリー民衆蜂起の衝撃も重なり、ソ連を「軍事的戒厳令的社会主義」と規定することになった。「原子力時代」の夢を先送りし、なお「原水爆時代」であるとして、原水爆禁止運動・原発反対住民運動・第三世界運動に関わるようになり、安全性や許容量の考え方の啓蒙に力点を移した。
- ③ ただし「原子力の平和利用」との原理的決別にはいたらず、そのことが、後に一緒に原子力資料情報室を立ち上げる高木仁三郎らとの関係に影を落とす。武谷三男は、自らが重要な役割を果たした日本共産党の原子力政策が2011. 3. 11 まで70年をかけて屈折・修正していく「原子力の平和利用」の論拠喪失過程を、戦後10年余りで体験し、駆け抜け、「卒業」していった。

1957. 7 『中央公論』 武谷「誤れる水爆主義者たち」放射能はどんな微量でもそれなりに有害、ソ連水爆実験で日本にも「死の灰」→平和論の転機、安全性・許容量→1975 原子力情報資料室代表→1976 『原子力発電』

1957. 11 『前衛』「党章草案・規約」発表特集、志賀義雄「十月社会主義大革命と日本共産党」「ソヴェト同盟が大陸間弾道弾のようないわゆる究極兵器をもっているということは、世界の人類にとってむしろ幸福だといわなければならない。なぜならば、戦後一貫して国際緊張を激化し戦争挑発者としての役割を演じてきたアメリカ帝国主義が、世界のいかなる地点においても、たとえばそれが局地的なものであろうとも戦争をはじめるといことは容易にできなくなった」

1958. 6 『思想』 武谷（久野収対談）ソ連＝「軍事的戒厳令的社会主義」、以後反原発住民運動へ

1958. 7-8 『前衛』 第7回党大会

野坂参三第一書記「中央委員会政治報告」

「変化の第一はソビエト連邦を先頭とする社会主義陣営が、アメリカを先頭とする帝国主義陣営にたいして優位を占めるにいたったこと」「人間の自然征服に新しい紀元をひらいたソ連の人工衛星の成功は、ソ連の科学技術の輝かしい勝利を証明している。それは社会主義体制の優位性と、その偉大な未来をさししめしている」

宮本顕治「綱領問題についての中央委員会報告1」

「1947年、アメリカ帝国主義者はトルーマン宣言によって、ソ連邦との戦時中の協力関係を公然と破棄し、ソ連邦に対する「力の政策」「冷い戦争」を宣言するにいたった。」アメリカ帝国主義の原子戦争準備、日本

の原水爆基地化、アメリカの極東原子戦略、「多くの自然科学者と技術的インテリゲンチヤの少なからぬ部分が人類の未来に輝かしい展望を約束するオートメーションと原子エネルギーが、独占資本をふとらせるために、また大量殺人兵器をつくるために利用されていることにつよく反対し、それを『平和、民主、自主』の三原則により、人類の幸福にだけ研究、利用することを熱望している」。要求「四 学問・芸術・文化の発展のために」2. 「原子力の軍事的目的への利用に反対、平和利用のための民主的自主的研究の奨励」、日本の技術的後進性・対米従属

1961. 7 第8回党大会における確立

・前提：1957 モスクワ 12 社会主義国共産党・労働者党宣言、1960. 11 81 か国共産党・労働者党声明「ソ連の科学は、世界文明の発展に新しい時代を開いた。ソ連は歴史上はじめて全人類のために共産主義の道をきり開いている。」「科学・技術の決定的部門で世界一の地位を占めた強大なソビエト連邦」

・1961 年綱領「世界資本主義の全般的危機の新しい段階」

・JCPの綱領的立場としての「原子力平和利用」一平和運動のなかでの分裂要因に（60年代原水禁、70年代反原発、80年代脱原発運動において「核と人類は共存できる」の立場で原水禁・脱原発運動批判）

1961. 7 『前衛』 第8回党大会

野坂議長報告 「ソ連は共産主義建設を全面的に展開する時期にはいり、その他の社会主義諸国は、つぎつぎと、社会主義社会の基礎の建設をおわってその完成の時期にうつりつつある」、「ソ連は、すでに科学・技術の点でアメリカを追いこしたが、とくに人類の歴史上はじめて人間をのせた宇宙船が地球を一周して無事に帰還したことは、だれもうたがうことのできない明白は事実をもってこのことを証明した。この数年中には主要工業生産部門の生産量の点でも、ソ連はアメリカに追いつこうとしている。また社会主義陣営の工業生産総額は、おなじく数年中に、資本主義世界のそれを追いぬくであろう」

綱領「世界資本主義の全般的危機の新しい段階」（原子力は綱領に入らず）

1961 . 7 「原子力問題にかんする決議」（『日本共産党決議決定集 7』）

「原子力の発見と解放によって、人類は一グラムの物質から二百五十億キロワット時という巨大なエネルギーをとりだせる可能性をえたばかりでなく、工業、農業のあらゆる生産分野から医療その他の日常生活の領域にいたるまで、画期的な展望を見だし、自然にたいする人類の英知のかがやかしい勝利を示した。原子力の問題は、「軍事的利用と平和的利用というたがいに対立する深刻な二面性をもっている。原子力についての敵の宣伝は、原子力をもつ人類の福祉のための無限の可能性が、帝国主義と独占体の支配する資本主義社会においてそのまま自動的に実現できるかのように主張している。しかし、帝国主義と独占体の支配のもとでは、軍事的利用が中心におかれ、それへの努力が陰に陽に追求され、平和的利用は大きく制限される。したがって軍事的利用を阻止し、平和利用、安全性をもちとる道は、帝国主義と独占体の支配の政策に反対する統一戦線の発展と勝利にむすびついている。原子力のもつ人類のあるゆる技術的可能性を十分に福祉に奉仕させることは、人民が主権をもつ新しい民主主義の社会、さらに社会主義、共産主義の社会においてのみ可能である。ソ連における原子力の平和利用はこのことを示している」

（2011. 5. 10 不破哲三『科学の目』で原発災害を考える」で「最初からきっぱり反対」の典拠とされたもの）

2011 年5 月10 日、日本共産党中央委員会主催の第4 回「古典教室」で、不破哲三・社会科学研究所所長がおこなった講演「科学の目で原発災害を考える」（5月14 日付「しんぶん赤旗」）

日本で、原子力発電が問題になってきたのは1950 年代の中ごろからで、1957 年には東海村で研究用の原子炉が初稼働し、1960 年代に商業用の発電が始まるのですが、日本共産党は、安全性の保障のない「未完成の技術」のまま原子力発電の道に踏み出すことには、最初からきっぱり反対してきました。

私たちが、党の綱領を決めたのは1961年7月の第8回党大会でしたが、その大会直前の中央委員会総会で、この問題を討議し、「原子力問題にかんする決議」を採択したのです。

その決議は、

—「わが国のエネルギー経済、技術発展の現状においては、危険をとまなう原子力発電所をいまだちに設置しなければならない条件は存在しない」

—原発の建設は、「原子力研究の基礎、応用全体の一層の発展、安全性と危険補償にたいする民主的な法的技術的措置の完了をまってから考慮されるべきである」

として、日本最初の商業用発電所とされた東海村の原子力発電所の建設工事の中止を要求したものでした。それ以来、この問題でのわが党の立場は一貫しているのです。そして、ただ「反対」というだけでなく、国会では、大事な局面ごとに、この問題を取り上げて、原発のもつ危険性とそれを管理・監督する政府の態度の無責任さを、具体的に取り上げてきました。（上記下線部分はすべて省略されている）

● 以上の過程での「原子力の平和利用」の存立論拠：武谷三男にとっては「見果てぬ夢」になる、その最大の問題は「原爆と違って水爆は戦争以外に全く役立たない」こと、放射性物質＝「死の灰」の処理の問題だった。

- ① 現存社会主義の核保有・技術的優位、
- ② 平和勢力の闘争による軍事利用阻止（原爆の平和利用2＝「社会主義」的抑止論）、
- ③ 利潤追求の資本主義のもとでの平和利用の限界、
- ④ 科学・技術者の熱望と原子力基本法3原則、
- ⑤ 巨大生産力の民衆的解放（原爆の平和利用1＝「開発技術としての原爆」を含む）、
- ⑥ 自然征服こそ人類の進歩

〈参考〉 いわゆる「新左翼」、黒田寛一の場合

① 「原子力の利用技術が、まずもって原水素爆弾として、次に原子力発電として開発されたことのなかに、二十世紀技術文明の悪が象徴的に示されている」（黒田寛一『実践と場所』第2巻、345頁）。「『原子力問題』は……たんに平和問題にかかわるだけではなく、そもそも科学・技術のブルジョア階級性に、資本の定有としての現代技術諸形態にかかわるのである。……現代技術文明そのものの歴史的品格が、その独占ブルジョア的本質そのものが、いまこそ問いなおされなければならない」（同、346頁）。

<http://blog.livedoor.jp/newrevolution/?p=2>

② 一方で「革命的左翼」を自称してきた私たちはどうだったのか。「自然の法則を探求し、自然を無限に支配してゆこうとする人類の知性は、ついに原子力の解放に成功した。」これは、黒田寛一が『現代における平和と革命』（1959）で第1章の冒頭に掲げた文章である。黒田はこのように核技術を賛美し、それを「ナチズムの打倒」や「日本帝国主義を崩壊せしめる武器」となると賛辞を贈っていた。われわれはこの思想と批判的に向き合うことはなかった。

<http://kakukyodo.jp/mirai1186.htm>

③ 「人間の知性は、原子力の解放に成功しました。だが、原子力は、全人類の福祉の向上と平和目的に使用されず、あべこべに大量殺人兵器の製造のために動員されている……」（黒田『社会観の探求』現代思潮社、第10刷、1967、23頁）

第1の転機 1960年代「社会主義の防衛的核＝原爆の平和利用、抑止力」に固執し、ソ連・中国の核実験を支持して原水禁運動の分裂を招く

〈参考〉森滝市郎日記・ソ連の核実験

原子力の軍事利用は否定し、平和利用は肯定するという、原子力に対する国民一般の態度は、日本の原水禁運動が起こってから数年間は無事に続いていた。ところが、軍事利用否定の根底に大きな亀裂を生ずる事件が起こった。

その発端は、一九六一年（昭和三十六年）八月三十一日にソ連が核実験再開の決定を発表したことにあった。その直前、八月半ばの第七回原水爆禁止世界大会の決議では、米国の実験再開の動きを強く警戒して「こんにち、実験を再開する政府は平和の敵、人類の敵として糾弾されるべきである」と表明されたばかりのところ、ソ連が最初に実験を再開してしまったのである。それだけに衝撃と困惑は、いっそう大きかった。

八月三十一日（木）の日記「ソ連核実験再開声明（モスクワ放送）、大きなショックと怒り。夜、県原水協担当常任理事会に於て、ソ連政府宛て再開中止要請電報を發し、理事長談話を發表して県原水協の態度を明らかにし、県民に奮起を促す」

九月一日（金）の日記「・・・夜、実験再開についてのソ連の声明全文を読む。再開せざるを得ない情勢と第三次大戦の勃（ぼつ）発を防ぐためという趣旨であるが、すべてこれ口実のみ。人類の立場は全然考えられていない。やはり人道への反逆である。『力』を信ずるものの犯すあやまりである」

九月三日（日）の日記「緊急課題としてソ連核実験再開問題。激論たたかわされ、結局は次の四項にまとまる。

ソ連の核実験再開に強く抗議する。

さらにその背後にある国際情勢を考え第三次大戦防止のため軍備全廃の運動をさらに推進する。

国連や非同盟諸国首脳会議（ベオグラード）に核実験中止をはたらきかける。

ソ連以外の核兵器保有国が連鎖的に実験をしないように各国に要請する。・・・

夜七時から平和会館で今日の会議から託された四項の処理。その第一項目のソ連政府への抗議文作成。その討議の中でH氏がソ連声明支持を表明し、抗議文に態度保留・・・」

十月十四日（土）の日記「・・・夜、共産党広島県委員会よりM氏とY氏が代表として来訪、申入書提出。・・・ソ連核実験再開を支持することこそ今の正しい平和運動であるから県原水協のこんどの集会（十月二十三日）でもそうなるようにしてもらいたいという趣旨・・・」

思えば、これから後三年間が日本の原水禁大会のいわば煉（れん）獄の歲月であった。その間に大衆討議で練り上げられた「原水禁運動の原則」もできた。国民の良識の結晶のような「二・二一声明」も出た。しかし、いずれも無残にじゅうりんされて焼津も広島も、長崎も、すさまじい混乱と分裂の場面となった。三つの被爆地は結束して奮起せざるをえなかった。やがて原水禁国民会議の誕生ともなった。あの人類史上空前の国民的体験から、いかなる国の、いかなる理由による核実験も核兵器も絶対に是認、肯定することはできないという、核絶対否定の思念と行動以外はありえなかったのである。

1962.10 JCP 第4回中央委員会総会

・ソ連の核実験再開、日本の右翼社会民主主義者・修正主義者はソ連政府に抗議、原水禁世界大会にも、「社会主義国と資本主義国の軍事力を戦争勢力として同一視」「核兵器対人類一般という、帝国主義戦争勢力を免罪し、核兵器一般を人類の敵とするという、非階級的、非科学的な抽象的命題に解消」するスローガン持ち

1964. 11 『前衛』 第9回党大会特集

・中央委員会報告「中国が余儀なくされた核実験の基本的意義は、アメリカによる核戦争の危険をともしなうアジアの侵略計画を打破するため」「わが党の当面の要求=原子力をはじめ、すべての科学、技術を米日反動の利益に奉仕させ、軍事的侵略的目的に利用することに反対し、その平和目的の自主的民主的研究と、人民の福祉と安全を保障するためにたたかう。原子力の平和利用と自主、民主、公開の3原則の厳守を要求する」

→1963年10月26日に茨城県東海村で12.5MWの動力試験炉を用いて2000kWの発電に成功(10月26日は原子力の日になる)→1970年3月日本原子力発電敦賀1号機、70年11月関西電力美浜1号機、71年3月東京電力福島第一原発1号機、72年7月関西電力美浜2号機、74年3月中国電力島根1号機運転開始

1966. 11 『前衛』 第10回党大会特集

・「核実験による放射能は、米ソいずれの実験を問わず当然それ自体生理的に有害なものである。われわれは、この実験そのものが持つ人体への有害な作用を軽視していない。だが、そこから世界平和の大局的な利益にとってのソ連核実験の政治的意義を、物理的な現象と混同することは正しくない。社会主義国の実験は、帝国主義者による核戦争を阻止する役割をもっている」「核実験の循環競争の機動力はアメリカ帝国主義である。したがってソ連の核実験に抗議することは、世界平和の立場からみて妥当でない」

→1973年11月日本共産党『**核兵器全面禁止と原水禁運動**』でようやく転換。論拠「この数年間重要な変化がおこった。社会主義国であるソ連と中国自体が互いに対立し合うようになった。…またソ連のチェコスロバキア侵略という、われわれが非難した事態、残念ながら社会主義国の大義に反した侵略行動がおこっている。このように中ソの国際政治における立場には変化が生じている。そういう段階で初期のように、中ソの行動がすべて無条件に防衛的なものだとか、よぎなくされたものだとは、簡単にいえなくなっている。」

(参考) 上田耕一郎『マルクス主義と平和運動』1965 vs. 加藤『国家論のルネサンス』1986

・JCPの平和論の枠組は、「資本主義の全般的危機」論=万年危機、具体的分析の放棄、世界史の「新段階」乱発、典型的には上田耕一郎。

・問題は、「万年危機」の断末魔イメージよりも、理論的核心としての「4大矛盾・3大革命勢力」論「4大矛盾」とは、

- (1) 資本と労働の階級矛盾、
- (2) 帝国主義=抑圧民族と被抑圧民族の民族矛盾、
- (3) 帝国主義国家間の矛盾、
- (4) 資本主義と社会主義の体制間矛盾、

というもので、当時の国際共産主義運動が共有する時代認識。単純にして便利な世界像で、もともとブハーリンのコミンテルン綱領草案1922年が起源。スターリン時代に世界に広がった。

上田はここから、①人民の内乱=革命戦争、②帝国主義に対する民族解放戦争、③社会主義の防衛戦争、を「正義の戦争」と抽出し、他は「不正義の戦争」とした。「社会主義内部の内乱・戦争」は、論理的に出てこないものだった。(加藤『国家論ルネサンス』所収、VI・VII章、1981) 同時に、

「3大革命勢力」が「正義の戦争」を闘う主体でアプリアリに「平和勢力」になる

- (1) 資本主義国内での労働者階級の闘争、
- (2) 被抑圧民族の反帝国主義民族解放運動、
- (3) ソ連・中国など社会主義国家体制、が無条件に「平和勢力」になり、

「帝国主義国家間戦争(ファシズム対民主主義)」の場合など必要に応じて帝国主義国家間矛盾を利用し、

「動揺する小ブルジョアジー」「平和主義者」を「平和勢力」「統一戦線」へと動員・利用する理論枠組。
・1960年「81カ国共産党労働者党声明」をもとに、60年代の共産党は、これを自明の前提とした
・1973年第12回大会で情勢変化から「社会主義の防衛的核」撤回、いわゆるユーロコミュニズムに接近し
76年第13回大会でプロレタリア独裁を「執権」に、77年第14回大会で現存社会主義を「生成期」に格下げ、
87年不破哲三「資本主義の全般的危機論の系譜と決算」でようやく理論的に離脱し、経済情勢依存、社会
主義国依存、万年危機論、段階論批判。しかし肝心の4大矛盾・3大革命勢力の問題を明確にせず、チェル
ノブイリ原発事故にあたって「生成期」論の立場からのゴルバチョフ批判で対処、特にゴルバチョフのペ
レストロイカ・新思考における「全人類的課題」優先を「階級的視点の放棄」と批判する根拠となった。

（参考）森滝市郎証言・核なき未来、科学者の良心

「核絶対否定」の立場で三県連が立ち上がり、その翌年、すなわち被爆二十周年（一九五六年）に原水禁
国民会議が出発した。しかし、そのころ使われた「核絶対否定」という表現は、単に「核兵器絶対否定」の
略語であって、今日、私たちが文字通り「核絶対否定」というのとは大きく違っていた。今日の私たちは「核
なき未来」をめざして、文字通り「核絶対否定」の立場に確固として立つのである。

今堀誠二氏の名著「原子力時代」は「原水爆時代から原子力時代へ」をめざしているのであるが、今日の
私たちは、その「原子力時代」をも否定して、「核なき未来」へ超え出ようとしているのである。

原水禁国民会議が「核兵器絶対否定」から文字通りの「核絶対否定」に到達するには、約七、八年の歳月
を要しているのである。そこに到達する私たちの核認識の推移をたどってみると、その要因は、やはり「放
射線害」の認識が、深刻かつ痛切になってきたことにあるのではないかと思われる。

被爆二十・二十一・二十二周年の原水禁大会あたりでは、まだ核兵器、核使用の恐ろしさは万人の認識と
なっても、「放射能害」の恐ろしさは、主として原爆被爆者の苦しみや不安に接する形で人びとに知られ伝わ
っていた。被爆二十三周年の原水禁大会になると、その大会基調の中に「世界各地に続発する放射能害」と
いう項目が設けられて、平常時でも核兵器の存在ゆえに、かくのごとく放射能害が起こっている、と警告し
た。すなわち国内では、佐世保で米原潜ソードフィッシュによる異常放射能で、「この魚には放射能はありま
せん」という貼り紙が魚屋の店頭をかざるなど、放射能害についての市民の大きな反応を呼び起こしたり、
六月二日には、九州大学に四千キューリーの放射能がはいったコバルト60照射実験室がある近所に、米軍
のF4Cファントム先頭爆撃機が墜落したりした。

一方、国外では、十四年前のビキニ水爆実験の死の灰を浴びたロンゲラップ島の住民の子どものうち、当
時十歳以下だったものの九割が甲状腺機能障害を起こしていることや、一九六一年以降、アメリカの原潜基
地として使用されてきたホーリーロッド港の海底土に増加した放射能は、米原潜の放出した冷却水によるも
のであることがイギリス海軍によって確認されたことや、アメリカの水爆搭載機B52が墜落したスペイン
のパロマレスでは、放射能害により住民や家畜に奇病が発生していることなどを挙げて、「このように放射能
災害は世界各地で続発しています。いまや、たとえ核戦争が起こらなくても、世界中に張りめぐらされた核
兵器が世界各地で放射能害をまきちらし、人類の生存に重大な危害を及ぼしはじめています・・・」と。

「放射能害」を重大視するようになった原水禁国民会議は、ついに翌被爆二十四周年（一九六九年）原水
禁大会ではじめて「原子力の『平和利用』問題」を掲げた。そこでは平和利用の問題点がかなり詳述され、
その結びに「私たちは軍事利用反対の立場を堅持した運動を推し進めるとともに、それに劣らない重要問題
として『平和利用』を重視し、広範な国民運動にしてゆくことを、とくに今年的重要課題に設定したいと思
います。このためにも、私たち自身もう一度、問題を真剣に学習し直し、自然科学的観点からみても、国民
を啓蒙できる知識と能力を備えつけなければなりません」と。

ともかくも被爆二十四周年から、はっきりと平和利用問題の学習にとりかかったのである。

被爆二十四周年原水禁大会（一九六九年）から、重要な課題として原子力の平和利用問題に取り組み始め
た原水禁国民会議は、翌年の被爆二十五周年の大会で、その基調にはっきりと「原子力発電所問題」を提言

し「原発問題分科会」を設けた。そして、次の被爆二十六周年（一九七一年）の大会には、初めてスローガンの一つに「安全の保障されない原子力発電所、核燃料再処理工場設置には反対しよう！」を掲げた。この年、一九七一年五、六月、私は原水禁オルグとして世界一周の旅をした。社会党政審勤務の丸山君が同行してくれた。主目的は「四月二十四日行進」という米国史上最大の反戦集会（ワシントン）に出席して、「ベトナムで戦術核兵器を使うな」と訴えることであつたが、もう一つの目的は、原発について憂慮する学者を歴訪し、その意見を聞いたり資料を集めたりすることであつた。

被爆二十七周年大会（一九七二年）で「最大の環境破壊・放射能公害を起こす原発、再処理工場設置に反対しよう」というスローガンを掲げたのは、私たちの核認識がそこまで進んだということもあるが、国内では「高度経済成長」のなかで環境破壊や公害の問題がいよいよ深刻化してくるとともに、世界では同じ年の六月にストックホルムで「国連人間環境会議」が開かれるという背景もあつたのである。

国内では、とくに原発設置反対の現地の住民運動があちこちに起こり、それを横につなぐ全国連絡会議の必要が起こり、「情報センター」の必要性も起こり、学者・専門家の助言・協力の必要性も切実に起こっていた。原水禁国民会議は、そんな必要性に対応する態勢をこの年あたりから取りはじめていたときでもあつた。この年の国際会議（一九七二年）には、前年から予約していたゴフマン教授は身の都合で出席できなくなつたが、入念なレポートを送ってくれたし、日本側からは辻一彦参院議員が「わが国における原子力発電所の問題点」という詳しい報告をした。とくに忘れがたいのは、この年のコルビー女史の発言であつた。そのなかでコルビー女史は言った。「過去において成功とは、核兵器の全面的かつ恒久的な廃絶を究極的になしとげることを意味しました。今日、成功とは、戦時、平和時を問わず原子力が使われることによって生ずるすべての放射能の廃棄をめざして成果をあげることを意味しております」と。軍事利用、平和利用ともに否定すべき方向を提唱したのである。そして「危機に陥っている惑星の市民として暗闇の谷間から真実の進歩の高原に通じる道を示さなければなりません。そのときこそ私たちは、原子力がもはや『人類の輝かしい夢』ではなく、むしろ悪夢であることに気づくでありましょう」と結んだ。コルビー女史が原水禁国民会議の「核絶対否定」に深く共鳴し、一貫して支持・協力する理由がここにある。

翌年、被爆二十八周年（一九七三年）の原水禁大会には、ゴフマン博士に代ってその盟友アーサー・タンプリン博士が来日した。博士は単に国際会議に出席するだけでなく、その前に一週間ばかり、日本各地の原発設置箇所を精力的に視察したり住民運動と交流したりした。そして、国際会議では、タンプリン博士の特別講演が重要な内容となつた。それ以後、この講演は、わが国の原発反対運動の基本理論を構築していく出発点ともなつた。博士は、「原子炉は、いまだかつて人類が経験したことの無いような大事故の可能性をもっている」とし、炉心溶解による大量の放射能流出を語る。そして、この種の事故を防ぐものとしての緊急炉心冷却装置（ECCS）も、その実験はまだすんでいないことを語る。さらに、博士が力説したのは原子炉が大量につくりだす放射性物質の問題、放射性廃棄物の究極的処理の未解決の問題、最後に、最大の問題としてプルトニウムの軍事転用と核拡散の問題はもとより、その絶望的な猛毒性の問題、その管理のために私たちの子孫が永久的にこうむる重圧の問題。原発反対の基本論理は、ほとんど解き尽くされたのである。なお、博士は最後にミクロネシアのロンゲラップ、ウトリックの島の住民の問題にふれ「放射能は、いまなおこれらの島に残っている」と警告した。

1970.7『前衛』第11回共産党大会特集

- ・核拡散防止条約ではなく核兵器禁止協定
- ・対米従属化の「高度成長」日本経済の畸形的な発展をおしすすめ、最新の重化学工業部門では国際的な巨大企業の列に入る大独占体を続出させ、電子工業、石油化学、原子力その他新産業部門をつくりだしながら、一部の産業や中小企業、農業などをきわめて困難な条件においこみ、公害問題や交通、住宅などの都市問題を特別にはげしくした。

第2の転機 「核と人類は共存できない」に反対し、反原爆運動と反原発運動の合流を妨害

● 共産党は1970年代総合エネルギー公社構想・石油代替の新エネルギー「原子力」で、「原爆と原発」住民運動・市民運動合流、原子力資料調査室（武谷・高木）に敵対、原水禁運動再統一のチャンスを見逃す

1973.11 第12回党大会決定「民主連合政府綱領についての日本共産党の提案」 ← 原水禁は1971年から「核と人類は共存できない」（森滝市朗）、「反原発」住民運動・市民運動の叢生（久米三四郎・高木仁三郎ら）、それに対して、

・「これからの新しいエネルギー源である原子力も、日米原子力協定によりアメリカから濃縮ウランの供給を受けながら、もっぱらGEやウェスティング・ハウスの軽水炉を導入しながら、原子力発電をすすめ、さらにアメリカ国内での日米共同の濃縮ウラン工場建設計画など、対米従属・依存の軌道のうえで開発がすすめられているのが特徴です。」

・「安全と放射能汚染防止の保障が充分でない現行の原子力発電計画を全面的に再検討し、自主・民主・公開の原子力三原則をまもり、安全で放射能汚染や環境の悪化をもたらさぬ原子力発電計画をつくり、新エネルギーの一環として原子力の研究、開発をすすめる。」

1974.6 電源三法（電源開発促進税法、電源開発促進対策特別会計法、発電用施設周辺地域整備法）が成立し原発をつくるごとに交付金が出てくる仕組みができる。

1974.7 東京電力の福島第一原発2号機運転開始

1975.3 「安全優先、国民本位の原子力開発をめざす日本共産党の提言」

「原子力の発見は、人類のエネルギー利用の将来に巨大な可能性をひらいた。しかし、世界的に核兵器優先の体制がとられてきたこととも関連して、また、原子力の平和利用のための研究・開発は、この新しいエネルギーの有効で経済的な利用でも、人類の安全保障の面でも、大局的にはまだはじまったばかりの段階であることから、今後の研究にまつところがきわめて多い。…ところが、現在自民党政府がすすめている原子力開発政策は、国民の安全の確保、エネルギーの自立性の保障、軍事利用の危険防止など、多くの点できわめて重大な致命的欠陥をもっている」=いわゆる「未完成の技術」論、ソ連「生成期」論に対応

1974.11 関西電力高浜1号機運転開始

1975.9 「原爆と原発」住民運動・市民運動シンポ、原子力資料情報室（武谷代表・高木世話人）設立

1975.10 九州電力玄海1号機運転開始

1975.11 関西電力高浜2号機運転開始

1976.3 中部電力浜岡1号機、東京電力福島第一3号機運転開始

1976.12 関西電力美浜3号機運転開始

1977.6 共産党『日本経済への提言』

「5 新エネルギーの自主的、民主的研究開発をすすめる」

・「21世紀にかけて、日本のエネルギーの安定した確保をはかっていくため、いまから、石油、石炭、天然ガスなどの化石燃料にかわる太陽エネルギー、核エネルギーの研究・開発や、既存のエネルギーの新しい利用方法の開発を確実にすすめる。」

・「日本共産党の原子力政策の基本は、①原子力の軍事利用を阻止し、②研究・開発の民主的、総合的發展をはかり、③安全、有効な平和利用をすすめることである」総合的な審議会の設置で、原子力問題の全面的検討の実施、原子力安全委員会の設置、原子力発電所の全面的な総点検、軍事利用の危険防止の措置、自主的、民主的、総合的な研究・開発体制の確立。」

1977.9 四国電力伊方1号機運転開始

1977.10 共産党第14回党大会 「現存する社会主義はまだ『生成期』にあるにすぎない」

(参考) 森滝市郎証言・核文明批判

広島原爆で一眼を失った秋から冬にかけて、中国山地の眼科医院で入院生活をしていたころ、私の胸中には一種の素朴な文明批判が芽ばえていた。いったい、原爆などというものを生み出すような現代文明の方向は、このまま進んでよいものであろうか。この方向では人類は自滅を招くのではないかと。

しかし、その後三十年間に、私たちの憂慮や批判や抵抗をあざ笑うかのように、軍事利用でも平和利用でも核の開発はすさまじく進められた。核兵器の備蓄は、広島型原爆に換算してその四百万発分に相当するといわれ、産業用のエネルギー源も主として核に求められようとする核時代に突入した。

政府や産業界は「軽水炉→増殖炉→融合炉」という図式で核エネルギー開発の展望を宣伝し、二十一世紀はあたかも壮大な核文明の華麗な世紀として迎えられるかのような夢をいだかせようとする。

しかし、そのような核文明の方向は人類にその未来を失わせるものである、と警告し、核と人類は共存しえないものと見定め、「核絶対否定」の決意と行動で人類の生存を守ろうとするのが私たち原水禁運動である。

被爆三十一周年原水禁大会（一九七六年）の基調演説の結びで私は、核時代の産業文明を批判し、非核文明の二十一世紀を迎えるべきであることを訴えた。いわく、「・・・もっとも心配なことは、プルトニウムを燃料とする高速増殖炉の開発によってプルトニウム経済の時代を招来するのだ、と豪語しているものがありますが、そんな巨大エネルギー、巨大産業の核文明を招来したら、その絶頂で、その未来を失うであります。巨大エネルギー、巨大開発、巨大生産、そして巨大消費という形態をとる核時代の産業文明は、いまこそその価値観を一大転換しなければなりません。価値観の転機とは何か。一言でいえば、すべて巨大なるものは悪であり、のろわれたるものである、いと小さきもの、いとつましきものこそ美しいものであり、よいものであるということでもあります。シューマッハー博士の言葉を借りると”ビッグ・イズ・イービル(悪)、スモール・イズ・ビューティフル”ということでもあります。

私たちは巨大なる核エネルギー産業文明によって子孫のものまで使いはたし、プルトニウムのようなやっかいきわまる遺産を子孫に残すべきではありません。いま私たちは、二十世紀の最後の四半世紀にさしかかりました。この四半世紀こそ、人類が生存への道を選ぶか、死滅への道を選ぶか、最後の機会であります。私たちは、やはり生存への道を選ばなければなりません。二十一世紀に生き延びなければなりません。生き延びる道は何か。核絶対否定の道しか残されてはいません。核は軍事利用であれ平和利用であれ、絶対に否定するよりほか、人類の生きる道はないのであります。いまこそ価値観を大転換させ、核文明を否定して非核文明をきずき、人間の深い、美しい生きざまをひらいていこうではありませんか」と。

ここでいう非核文明の方向をひらいてゆくためには、大まかにいって二つの道がある。一つはイングリシ博士が提言するように、核エネルギー以外の代替エネルギーを開発する道である。太陽熱、風力、地熱、潮位の差を利用する発電である。もう一つの道は、人間の生きざまを「自然易簡」の道にかえすことである。

「自然征服」の思想と生活から「自然育順」の思想と生活にかえることである。私は昨年（一九七八年）、国連訪問後、ニュー・ハンブシャー班に加わってアマーストを訪れ、イングリシ博士に再会して相語り、アマースト郊外のモンタギュー村で「自然農場」を営むラヴジョーイさんを中心とする九人の同志の新しい生きざまの探求に感動した。アマースト訪問で、私は非核文明のビジョンを得たのである。

1978. 8. 11『赤旗』主張「原水禁世界大会の成果を生かし、真の統一を」←1977-85 原水協・原水禁統一世界大会

・「いうまでもなく、わが党は、原子力そのものの開発、平和利用を核兵器と同列におき全面的に禁止すべきであるというような「反科学」の立場はとっていません。つまり「核」と名のつくものは、それが核兵器であろうが、平和利用であろうが、全部否定するという立場をとっていません。しかし、同時に、わが党は原水爆禁止運動の場にこの問題を提起し、賛否を問うことは原水爆禁止つまり核兵器禁止という運動の性格から正しくない、との立場をとってきました。ところが、統一実行委員会（1977 原水爆禁止世界大会実行委員会）主催による世界大会とは別に“独自集会”をひらいた一部の人びとは、核兵器全面禁止の要求といっしょに、原子力の平和利用にも反対、原子力発電所反対を大会がとりあげるよう求めてきました。もし大会がこうした意見に同調するなら、原水爆禁止運動は、本来の核兵器全面禁止の運動から核エネルギーの平和利用への反対をふくむ「核絶対否定」運動に変質し、運動の根本目的をあいまいにし、社会進歩の歴史にも反する結果をまねくでしょう。

1981. 7「原子力開発は総否定すべきか 核絶対否定論の誤りをつく」

川口清（平和問題対策委員会）（「赤旗」評論特集版 1981. 7. 27）

・「わが国の原発開発は、アメリカの原子力世界戦略の展開に忠実に呼応し、原子炉、核燃料からの安全審査にいたるまでアメリカにたより、安全確保にかかわる科学、技術の研究・開発の面でも、原子力安全行政の面でも、自主的な力量を築きあげることにはほとんど努力せずにすすめられています。敦賀原発事故（「赤旗」81・4・2 報道）は、こうした無責任な安全審査・管理体制を白日のもとにさらけだしたものであります。このような事態は、当然のことながら原発に反対する運動や、原子力開発にたいするさまざまな運動を誕生させ、活発にさせてきました。その多くは、安全をまもり、自然環境をまもる等々の積極的な意味をもつ運動であります。しかしそれらの運動は、原水爆禁止運動とは次元が異なる運動であることはいままでのことでは、とはいえ原爆被爆という最大の放射能禍に反対し、その被害を受けた被爆者の援護を基本目標のひとつとする原水禁運動は、原発問題を直接の課題とはしませんが、原発開発などによる放射能の環境汚染や人体被爆の問題に関心を持ち、放射能から人類をまもるという立場で、原発開発などによる放射能禍に反対する運動とは適切に連帯することができるでしょう。……

・統一世界大会も今年で5回目となります。しかしその一方で『禁』（原水爆禁止日本国民会議）は、いぜんとして分裂の論理に固執する態度をとっています。「いかなる国の核実験にも反対」論の破綻にたいしても、逆にその論理をいっそう拡大し、「いかなる国のいかなる核にも反対」とすることによって、とりつくりおうとしています。そのため『禁』は、「核兵器と原発との理論的構造の同一性の認識」「核兵器拡散の理論的認識」「核の破壊作用の人類の視野から地球の生態系的視野への拡大の必要性の認識」などを得たとして、原水禁運動は「ウラン採掘から原発やウラン濃縮工場、あるいは使用済み核燃料再処理工場までの一連の核エネルギー体系が反対の対象」（被爆35周年原水爆禁止大会実行委員会発行の『討議資料』）であると主張し、「被爆35周年原水爆禁止大会」では、「核絶対否定の実現のために」「たたかいをさらに前進させよう」と宣言しています。

・このような『禁』の主張は、第一に、核兵器も原発も原子力の解放によって誕生したものであり、原発は核拡散に道をひらくうえ放射能災害の大きな危険性をもっているのだから両者は分かちがたいとして同列視することによって、原発開発とは量的にも質的にも比較できないほど大きい核軍拡の危険性をあいまいにするものです。しかも危険の元凶は“原子力の解放”そのものであるとすることによって、危険な核軍拡をおしすすめる勢力を事実上免罪しているのです。これが原水禁運動の基本目標と当面の緊急課題から、運動をそらさせる役割を果たすことは明白です。

・結局、このような『禁』の誤った主張のいきつくさきは、「日本の原水禁運動は核兵器のみを対象とするというかたよった一面性をもっていた」とか、「いつまでも核兵器にこだわるという保守性が多くの日本人に定

着している」(同前)などと、日本国民の悲願ともなっている核兵器禁止を要求する運動に、日米支配層顔負けの非難をあびせかけるというところなのです。

・第二に、『禁』の主張は、原水禁運動の分裂を固定化するための理由づけ以外のなにものでもないことです。今日の重大な情勢は、わが国の原水禁運動の責務をいっそう大きなものにしており、運動の発展を保障する組織統一の実現をあらためて重要な問題としているにもかかわらず、『禁』は「核絶対否定」をその存在理由とすることによって、あくまで組織統一に反対する態度をとっているのです。(共産党『核兵器廃絶を緊急課題として 原水禁運動の統一と日本共産党』日本共産党中央委員会出版局、1984)

→統一労組懇問題から、84年原水協内クーデタ (吉田嘉清・草野信男ら解任、古在由重・江口朴郎ら離脱)

第3の転機：チェルノブイリ後の広瀬隆ブーム、高木仁三郎らの脱原発運動を「反科学」と

批判し、「原子力の平和利用」を弁証法的唯物論の原理に仕立てあげる

● 1980年代 スリーマイル島・チェルノブイリ事故後も「平和利用」理念に固執、高木仁三郎・原水禁の「脱原発」運動を批判し広瀬隆ブームに冷や水、「未完成技術」論にもとづく「放射性廃棄物をロケットに積んで太陽にぶちこむ」夢で、JCPは日本における非核運動の分裂を固定化

1985/11 第17回党大会綱領改定(「当面する行動綱領」部分の昇格、スリーマイル後、チェルノブイリ前)

「党は、原子力の軍事利用に反対し、自主・民主・公開の原子力平和利用3原則の厳守、安全優先の立場から原子力開発政策の根本的転換とその民主的規制を要求する。」

1987.11『前衛』 不破哲三「資本主義の全般的危機論の系譜と決算」経済情勢依存、社会主義国依存、万年危機論、段階論批判、しかし肝心の4大矛盾・3大革命勢力を明確にせず。

1987-89 広瀬隆現象を左から撃つ

広瀬隆『危険な話 チェルノブイリと日本の運命』87/4刊、88/6 36刷30万部

・1988.7 日本共産党『文化評論』号、座談会「ペレストロイカでソ連はどう変わるか」「原発なにが問題か」(反原発論の危険性、一種のラダイト運動、「ほんとうの原子力の平和利用の展望は、核兵器がなくなれば出てこない」、「核対人類」論批判)、

・この『文化評論』所収論文・野口邦和「広瀬隆『危険な話』の危険なウソ」は、文藝春秋8月号転載され「デタラメだらけの『危険な話』(反原発の聖書は無知と非常識に満ちている)に。電力会社は、日本原子力文化振興財団『つくられた恐怖』と共に、大量配布。

・中村政雄『原子力と報道』(中公新書2004) ヒロセタカシ現象にとどめを刺したのは、共産党系といわれている日本科学者会議原子力問題研究会(中島篤之助委員長)だ。1988年5月22日、同研究会が東京の学士会館別館で開いたシンポジウム「原子力をめぐる最近の諸問題」で、話題の本『危険な話』を取り上げた。「内容に誤りが多い」「いたずらに人を不安に陥れようとするものだ」と複数の研究者が強く批判した。この一撃以後、広瀬の発言は信頼を失っていった。原子力推進側の学者や役人が、にがにがしく思いながらも何も出来なかったことを、非体制側の学者グループがやってのけた(pp. 39-40)、吉岡斉『新版 原子力の社会史』(朝日新聞出版、2011, pp. 227-228)。

1989.4『月刊学習』高原晋吉「原子力発電問題をめぐる政治的対決」＝「核と人類は共存できない」批判
高木仁三郎と原水禁への批判 「わが党と『脱原発』派の、原子力に対する見方の違いはどこにあるのか、

端的にいうと、『脱原発』派は、現在の原発が危険だということから、将来にわたって原子力の平和利用を認めないことを原則的な立場にしています。それに対して、私たちは、現在の原発の危険性を正面から指摘し、その危険に反対する点では、もっとも一貫した立場をとりますが、人類の英知の所産である原子力の平和利用の可能性を原則的に否定する立場はとらない、という点にあります」

「脱原発派は、核と人類は共存できない、原発はなくす以外にはない、ということを主張しています。われわれは、原子力の発展は人類の英知の所産だという立場です。人類は失敗を繰り返しながら、科学・技術を発展させてきました。同様に、将来もまた、発展してくださる、というのが、われわれの哲学、弁証法的唯物論の立場です。だから、人間はやがて科学・技術の発展によって安全な原発を実現させる方向にすすむだろう、したがって、それを研究することは当然であるといっています。ところが、脱原発派は、そんな原子炉などできない、という固定観念から一歩も出ません。核と人類は共存できないの一本槍です。」

「私は、科学の進歩によって、必ず死の灰を無害にする技術か、再利用するなどの技術は、人類はみつけるにちがいないと思います。また、そうなれば、将来は原発の安全炉ができるわけです。夢物語みたいなことですが、私は放射性廃棄物をロケットに積んで太陽にぶちこむという方法もあると思います。太陽の引力圏に送り込んでやれば、後は太陽が吸い込んでくれるでしょう。太陽はものすごく大きいものですから、世界中の放射性廃棄物を全部送り込んでも『チュン』というくらいのもです」（日本共産党『原発の危険と住民運動』1990 所収）

1990. 12. 8 不破哲三「今日の原発問題を考えるいくつかの基本点—原発問題・日本共産党全都道府県担当者会議でのあいさつ」

「もう一つの問題は、原子力発電の現段階の到達点だけを見て、そこに欠点があるからといって、核エネルギーの平和利用の将来にわたる可能性を全部否定してしまうというのは、短絡的な議論になるということです。なにしろ、原理が発見されてからまだ五〇年、人類の歴史からいえば、われわれは、核エネルギーを利用するほんの端緒、入口の段階にあるわけですから、その入口の段階で、将来の可能性を全部否定するわけにはゆかないのです。実際、これまでの開発の経過を見ても、戦争目的、軍事用ということで、強行開発してくるなかで、平和目的でもっと落ち着いて開発にとりくんでいたら、新しい発展の芽になったかもしれないものがつぶされてしまったということも、結構あるのです。」（日本共産党中央委員会出版局『原発事故と『安全神話』—美浜・チェルノブイリの教訓—』1991）

1994. 4 「新日本経済への提言」

「原子力は安全性からみても技術的に未確立であることを認識して、その段階をふまえた研究開発をすすめることを重点にする。したがって、当面、原発の新增設は一切おこなわない。また既設原発については、総点検をおこない、その結果に応じて永久停止、改修、出力低下などの緊急措置をとる」

1994. 7 共産党第 20 回党大会

「日本の人民が、唯一の被爆国の国民として、反核・平和のたたかいと自国の解放闘争をおしすすめることは、アジアと世界の平和と社会進歩への重要な貢献となる。また、発達した資本主義国・日本における革命運動の前進が、世界史的な社会進歩の事業にとって、きわめて大きな役割をになうことも、確実である。日本人民の解放闘争を前進・勝利させることは、わが党と労働者階級の日本人民にたいする責務であるとともに、国際的な責務でもある。」

「党は、独占資本の活動や軍事基地などによる環境破壊と公害に反対し、自然と環境をまもる。党は、原子力の軍事利用に反対し、自主・民主・公開の三原則の厳守、安全優先の立場での原子力開発政策の根本的転換と民主的規制を要求する。」

第4の転機：フクシマの悲劇を見ても、なお「平和利用」を唱えるのか？

● 存立条件も綱領も変わり、2011年フクシマの悲劇を見てもなお「2、3世紀先の平和利用可能性」（志位・福島「老舗」対談）を信仰——意見の相違で運動を分裂させてきた過去の自省を

2000.11 第22回党大会「ソ連型の政治・経済・社会体制は社会主義とは縁もゆかりもない体制であり、……人間抑圧の社会体制の出現を絶対にゆるさない」決議「低エネルギー社会の実現、再生可能エネルギーの開発をすすめながら、原発からの段階的撤退をめざすべきである」

2003.6 第22回党大会第7回中央委員会総会

不破哲三議長(当時)発言「原発の問題でもっと具体的な提起を、という発言は、多くの方からありました。……現在、私たちは、原発の段階的撤退などの政策を提起していますが、それは、核エネルギーの平和利用の技術が、現在たいへん不完全な段階にあることを前提としての、問題点の指摘であり、政策提起であります。しかし、綱領で、エネルギー問題をとりあげる場合には、将来、核エネルギーの平和利用の問題で、いろいろな新しい可能性や発展がありうることも考えに入れて、問題を見る必要があります。ですから、私たちは、党として、現在の原発の危険性については、もっともきびしく追及し、必要な告発をおこなってきましたが、将来展望にかんしては、核エネルギーの平和利用をいっさい拒否するという立場をとったことは、一度もないのです。現在の原子力開発は、軍事利用優先で、その副産物を平和的に利用するというやり方ですすんできた、きわめて狭い枠組みのもので、現在までに踏み出されたのは、きわめて不完全な第一歩にすぎません。人類が平和利用に徹し、その立場から英知を結集すれば、どんなに新しい展開が起こりうるか、これは、いまから予想するわけにはゆかないことです。」

大会決議「政府は、二十一世紀のエネルギーを、原子力発電所の大増設と、プルトニウムをくりかえし利用する路線に頼り切るといふ政策をとっている。このようなエネルギー政策をとっている国は主要国では日本だけである。欧米の主要国のほとんどが、原発建設計画をもたず、プルトニウム循環方式からも撤退しているなかで、日本のエネルギー政策の異常さはきわだっている。世界の主要国で放棄された政策にしがみついた政府の姿勢は、この問題でも国民の未来を危険にさらす。昨年スウェーデンが原発の閉鎖に足を踏みだしたのにつづいて、ドイツが二〇二〇年代初めまでに原発を全廃することを決定した。原発大増設とプルトニウム循環方式という危険きわまりない政策を中止し、低エネルギー社会の実現、再生可能エネルギーの開発をすすめながら、原発からの段階的撤退をめざすべきである。」

2004.1 第23回党大会改定新綱領〈原発条項削除〉

・旧 1985- 「党は、原子力の軍事利用に反対し、自主・民主・公開の三原則の厳守、安全優先の立場での原子力開発政策の根本的転換と民主的規制を要求する。」

→新：「国民生活の安全の確保および国内資源の有効な活用の見地から、食料自給率の向上、安全優先のエネルギー体制と自給率の引き上げを重視し、農林水産政策、エネルギー政策の根本的な転換をはかる。」

2011.5.14 「しんぶん赤旗」不破哲三「科学の目で原発災害を考える」

2011.6.14 「原発からのすみやかな撤退、自然エネルギーの本格的導入を」『しんぶん赤旗』「原発ゼロ」

2011.8.25 『毎日新聞』志位和夫共産党委員長と福島社民党主との反核「老舗」対談

「志位 1953年、アイゼンハワー米大統領が国連演説で「アトムズ・フォー・ピース」、原子力の平和

利用を呼びかけました。これにちよて55年に日米原子力協定が結ばれ、原子力基本法がつくられていく。当時、安全性が保証されていない、ときっぱり反対したのは共産党でした。以来、商業用原発の建設にノーと言いつけてきた。

福島 しかし、共産党は核の平和利用について認めてきたんですね。社民党は、核と人類は共存できない、いかなる国の、いかなる核にも反対、です。核の平和利用はありえない、と訴え、行動してきました。

志位 私たちは核エネルギーの平和利用の将来にわたる可能性、その基礎研究までは否定しない。将来、2、3世紀後、新しい知見が出るかもしれない。その可能性までふさいでしまうのはいかがかとの考えなんです。

福島 共産党は極めて安全な原発なら推進してもいいんですか？

志位 そうじゃない。現在の科学と技術の発展段階では、「安全な原発などありえない」と言っています。いま問われているのは、原発ゼロの日本にしようということですよ。

福島 安全な原発はないし、核の平和利用と言って原発を肯定するのはおかしいです。

志位 そこでは意見が違っても原発ゼロでの協力は可能だと考えています」

(参考文献)

日本共産党科学技術部「日本の科学・技術の欠陥と共産主義者の任務」(『前衛』10-11号、1946.11、武谷三男「科学と技術」1理論社1950、に全文収録)

徳田球一ほか7名「徳田球一氏にきく(座談会)民主日本の建設と科学・技術、日本共産党出版部『科学と技術』1948.5

徳田球一『原子爆弾と世界恐慌』永美書房、1949.12.25

徳田球一「原子爆弾と世界恐慌を語る」日本共産党『新しい世界』30号、1950.1

民科学技術部会編『資本主義法則と科学技術』1950 徳田球一「科学と技術におけるマルクス・レーニン主義の勝利」

民科学物理学部会『季刊理論別冊 日本の原子力問題』(理論社、1953)

『日本共産党の方針：6全協決議、文化人から党への言葉』(岩崎新書、1955)

『日本共産党綱領問題文献集』上中下(青木文庫、1957)

『日本共産党綱領集』1962

平野義太郎「戦争と平和における科学の役割」(『中央公論』1948.4)

現代日本思想体系第25巻『科学の思想』(筑摩書房、1964) 武谷「革命期における思惟の基準」渡辺慧「原子党宣言」

武谷三男『原子力』(毎日新聞社、1950)

武谷三男編『原子力発電』(岩波新書、1976)

『武谷三男著作集』全6巻(勁草書房、1968-70)

『武谷三男現代論集』全7巻(勁草書房、1974-77)

日本共産党中央委員会『原発の危険と住民運動』1990

同『原発事故と「安全神話」』1991

ウェブ「日本共産党資料館」

http://space.geocities.jp/sazanami_tusin/

「不条理なる日本共産党」

http://blog.livedoor.jp/fujouri_jcp/archives/65645437.html

れんだいこ「原子力発電決別考」「日本における原子力政策史考」「日共の原子力政策史考」

<http://www.marino.ne.jp/~rendaico/genshiryokuhatudenco/top.htm>

<http://www.marino.ne.jp/~rendaico/jissen/hansenheiwaco/genshiryokuhatudenco/history.htm>

<http://08120.715.cocolog-nifty.com/blog/2011/04/post-f9b2.html>

れんだいこ「原水禁運動考」「原水禁運動の歩み」

<http://www.marino.ne.jp/~rendaico/iissen/hansenheiwaco/gensuikinundoco/gensuikinundoco.htm>

http://www.marino.ne.jp/~rendaico/miyamotoron/miyamotoron_hosoku31_gensuikinnoayumi.htm

上田耕一郎『マルクス主義と平和運動』（大月書店、1965）

加藤哲郎『国家論のルネサンス』（青木書店、1986）

後藤茂「原子力論争を繰り広げた旧社会党の原子力史」（EIT Journal, 58, July 2008）

<http://www.eit.or.jp/magazine/pdf/EIT58.pdf>

森滝市郎『反核三〇年』（日本評論社、1976）

森滝市郎・前野良・岩松繁俊・池山重朗『非核未来に向けて 反核運動40年史』（績文堂、1985）

森滝市郎『核絶対否定への歩み』（溪水社、1994）

池山重朗『原爆・原発』（現代の理論社、1978）

吉川勇一『市民運動の宿題』（思想の科学社、1991）

武藤一羊『潜在的核保有と戦後国家』（社会評論社、2011）

原水禁『開かれたパンドラの箱と核廃絶のたたかひ』（七つ森書店、2002）

鈴木真奈美『核大国化する日本 平和利用と核武装論』（平凡社新書、2006）

大庭里美『核拡散と原発：希望の種子を広めるために』（南方新社、2005）

原爆体験を伝える会・編『原爆から原発まで――核セミナーの記録』上下（アグネ、1975.9）袖井林二郎「原爆はいかに報道されたか」（講座コミュニケーション『原爆報道 事件と報道』研究社、1972 の要約）、岩垂弘「報道に見る原爆と原発」

岩垂弘『「核」に立ち向かった人々』（日本図書センター、2005）

高木仁三郎『原子力神話からの解放』（講談社文庫、2011）

高木仁三郎『市民科学者として生きる』（岩波新書、1999）

道場親信『占領と平和』（青土社、2005）

道場他編『社会運動の社会学』（有斐閣選書、2004）樋口直人「未来の『予言者』としての社会運動」

本田宏『脱原子力の運動と政治』（北大出版会、2005）

長谷川公一『脱原子力社会の選択-新エネルギー革命の時代』（新曜社、1996）

開沼博『「フクシマ」論』（青土社、2011）

丸浜江里子『原水禁署名運動の誕生』（凱風社、2011）

藤原修「原水爆禁止運動の成立」明治学院国際平和研究所『平和研双書』No. 1、1999

<http://www.meijigakuin.ac.jp/~prime/shuppan/heiwa/index.html>

藤原修「原水爆禁止運動の分裂をめぐって」東京経済大学『現代法学』第19号、2010

<http://www.tku.ac.jp/kiyou/contents/law/19/Fujiwara.pdf>

八代拓「戦争責任論議における加害意識の表出過程：歴研、日教組、原水禁運動」2007

<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/courses/2007/50020/documents/50020-2.pdf>

民科『科学年鑑』1947/48/49年版（日本科学社）

民科自然科学部会共同デスク『死の灰のゆくえ』（蒼樹社、1954）

民科共同デスク『死の灰から原子力発電へ』（蒼樹社、1954）

林克也『未来をつくりだす原子力』（青木新書、1955）

日本平和委員会『平和運動20年運動史』『平和運動20年資料集』（大月書店、1969）

日本科学者会議編『科学者運動の証言』（白石書店、1978）

- 日本科学者会議編『現代社会と科学者 日科の15年』(大月書店、1980)
- 日本科学者会議編『核 知る・考える・調べる』(合同出版、1982)
- 日本科学者会議編『原子力発電 知る・考える・調べる』(合同出版、1985)
- 日本科学者会議編『原子力と人類』(リベルタ出版、1990)
- 日本科学者会議編『科学と人間 日科の30年』(水曜社、1996)
- 吉岡斉『新版 原子力の社会史』(朝日新聞出版、2011、旧版1999)
- 中山茂・後藤邦夫・吉岡斉編『通史 日本の科学技術』全4巻+索引巻(学陽書房、1995)
- 吉岡斉『科学者は変わるか』(社会思想社、1984)
- 吉岡斉『科学革命の政治学』(中公新書、1987)
- 中山茂『科学技術の戦後史』(岩波新書、1995)
- 現代技術史研究会編『徹底検証 21世紀の全技術』(藤原書店、2010)
- J・ダワー「二号研究とF号研究—戦時日本の原爆研究」(ダワー『昭和』みすず書房、2010、所収)
『昭和史の天皇』第4巻(読売新聞社、1968、のちに角川文庫)
- 福井崇時「日米の原爆製造計画の概要」『原子核研究』第52巻1号(『原子核研究』編集委員会、2007年)
<http://www.viva-ars.com/bunko/fukui/fukui-6a.pdf>
- 鳥飼行博研究室「日本の原爆開発、核兵器使用の可能性」
<http://www.geocities.jp/torikai007/war/1945/japan-atomic.htm>
- 木村朗「原爆神話からの解放と核抑止論の克服—ヒロシマ、ナガサキからフクシマへ」
<http://chikyuzo.net/n/archives/13482>
- 木村朗・カズニック『広島・長崎への原爆投下再考』(法律文化社、2010)
- 廣重徹『戦後日本の科学運動』(中央公論社、1960)
- 広重徹編『日本資本主義と科学技術』(三一書房、1962)
- 中村静治『新版 技術論争史』(創風社、1995)
- H. G. ウェルズ『解放された世界』(1913、岩波文庫)
- 岩下孤舟「世界の最大秘密」『新青年』1巻8号、1920.8
- 立川賢「桑港(サンフランシスコ)けし飛ぶ」『新青年』1944.7
- リチャード・ローズ(神沼二真、渋谷泰一訳)『原子爆弾の誕生』上下(1993 啓学出版; 1995 紀伊國屋書店)
- 山際晃・立花誠逸編『資料 マンハッタン計画』(大月書店、1993)
- 山崎正勝『日本の核開発 1939-1955』(績文堂、2011)
- 山崎正勝・日野川静枝編著『増補 原爆はこうして開発された』(青木書店、1997)
- トマス・パワーズ(著)/鈴木主税(訳)『なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか 連合国が最も恐れた男・天才ハイゼンベルクの闘い』上下(福武書店、1994年)
- Mark Walker, *Nazi-Science: Myth, Truth, and the German Atomic Bomb*, Perseus 1995
- 清水榮『放射能研究の初期の歴史』(丸善、2004)
- ポーエン・C・ディーンズ『占領軍の科学技術基礎づくり: 占領下日本 1945-1952』笹本征男訳(河出書房新社、2003)
- GHQ日本占領史第51巻『日本の科学技術の再編』(日本図書センター、1996)
- 市川浩・山崎正勝責任編集『“戦争と科学”の諸相: 原爆と科学者をめぐる2つのシンポジウムの記録』(丸善、2006)
『科学』「特集 核と原発」81-12, 2011. 12
『歴史学研究』「緊急特集 東日本大震災・原発事故と歴史学」No. 884, 2011. 10
- 読売新聞社科学部『原子力文明』(高山書院、1949)

仁科芳夫『原子力と私』(学風書院、1950)
山本義隆『福島原発事故をめぐって いくつか学び考えたこと』(みすず書房、2011)
田中利幸『『原子力平和利用』と広島——宣伝工作のターゲットにされた被爆者たち』『世界』2011. 8
田中利幸、ピーター・カズニック『原発とヒロシマ——「原子力平和利用」の真相』(岩波ブックレット、2011)

嵯峨根遼吉「原子核に関する実験」文部省学術講演会叢書、1943
嵯峨根遼吉『原子爆弾』(朝日新聞社、1945. 10)
嵯峨根遼吉『原子爆弾の話』(講談社、1949)
嵯峨根遼吉「原子核の科学、50年の歩み」『科学圏』別冊、1949. 11)
嵯峨根遼吉『欧米の原子力事情と発電』(外務省国際協力局第3課、1957. 3. 15)
『嵯峨根遼吉記念文集』(嵯峨根遼吉記念文集出版会、1981)
H・W・ブレイクスリー『原子力の将来』山屋三郎訳(朝日新聞社、1947)
ブラッドリー『隠るべき所なし—ビキニ環礁原爆実験記録』佐藤亮一訳(講談社、1949)
R. E. ラップ『我等は隠るべきか』奥田毅(南条書店、1950)
ジョン・ハーシー『ヒロシマ』1946(増補版、法政大学出版会、2003)
永井隆編集『原子雲の下に生きて』1949
奥田博子『原爆の記憶』(慶應義塾大学出版会、2010)
『木村一治日記：ヒロシマ・長崎の原爆調査の記：1945年4月16日～10月10日』木村正子編、仙台：木村正子、1998
木村一治『核と共に50年』(築地書館、1990)
三宅泰雄『死の灰と闘う科学者』(岩波新書、1972)

高橋博子「広島の原爆・被爆・核兵器関連資料」『インテリジェンス』5号、2005
中村政雄『原子力と報道』(中公新書、2004)
飯高季雄『次世代に伝えたい 原子力重大事件&エピソード』(日刊工業新聞社、2010)
柴田鐵治・友清裕昭『原発国民世論—世論調査にみる原子力意識の変遷』(ERC出版、1999)
原子力安全システム研究所『データが語る原子力の世論』(プレジデント社、2004)
中村功他、原子力安全基盤調査研究「日本人の安全観」報告書(東洋大学、2004)
<http://nakamuraisao.a.la9.jp/anzenkan.htm> (特に第3章)
七沢潔「原子力50年、テレビは何を伝えてきたか」『NHK放送文化研究所年報2008』
<http://www.nhk.or.jp/bunken/resarch/title/year/2008/pdf/007.pdf>
「過去の原発報道関連文献」
<http://d.hatena.ne.jp/dojin/touch/20110419>
伊藤宏「新聞は4/26をどう伝えてきたか—マス・メディアにとってのチェルノブイリ」
<http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/NSRG/tvt2004/itou.pdf>
伊藤宏「原子力開発・利用をめぐるメディア議題—朝日新聞社説の分析」上中下(『プール学院大学研究紀要』44/45/49, 2005-09)
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110001136834/>
加藤尊秋ほか「原子力発電のリスクの正体とリスクコミュニケーション」日本原子力学会報告1-19, 2004
http://t2r2.star.titech.ac.jp/cgi-bin/researcherpublicationlist.cgi?q_researcher_content_number=CTT100381141&alldisp=1&tab_vf=2011
加藤尊秋・岡本浩一・松本史朗「原子力発電に関する社会調査の動向と展望」. 東京工業大学社会工学専攻ディスカッションペーパー、2004
<http://www.soc.titech.ac.jp/~library/discuss/text/dp04-08.pdf>

飯高季雄「報道から見た原子力」(日本原子力産業会議『原子力年鑑 2005』)

中島達雄「原子力報道にみるマスメディア間の相互作用とその要因の分析」(『社会技術研究論文集』Vol. 7, 110-119, March 2010) http://shakai-gi-jutsu.org/vol7/7_110.pdf

モニカ・ブラウ『検閲 1945 - 1949 : 禁じられた原爆報道』(時事通信社、1988、新版2011)

堀部清子『原爆 表現と検閲—日本人はどう対応したか』(朝日選書、1995)

笹本征男『米軍占領下の原爆調査：原爆加害国になった日本』(新幹社、1995)

高橋博子『封印されたヒロシマ・ナガサキ—米核実験と民間防衛計画』(凱風社、2008)

繁沢敦子『原爆と検閲：アメリカ人記者たちが見た広島・長崎』(中公新書、2010)

奥田博子『原爆の記憶—ヒロシマ/ナガサキの思想』(慶應義塾大学出版会、2010)

中川正美「原爆報道と検閲」『インテリジェンス』3号、2003

NHK『ヒロシマはどう記録されたか』(NHK 出版、2003)

御代川貴久夫「プランゲ文庫データベースからみる占領期における科学技術」『インテリジェンス』6号、2005

Silvia Lidia Gonzalez, *Hiroshima, la noticia que nunca fue* (トップニュースにならなかった広島), Japan Foundation, 2004.

武田徹『私たちはこうして「原発大国」を選んだ』(「核」論 2002, 中公新書、2011)

川村湊『原発と原爆—「核」の戦後精神史』(河出書房新社、2011)

山岡淳一郎『原発と権力』(ちくま新書、2011)

御代川貴久夫「占領期における『原子力の平和利用』をめぐる言説」(山本武利編『占領期文化をひらく』早稲田大学出版部、2006 所収)、

井川充雄「原子力平和利用博覧会と新聞社」(津川澤聴廣編『戦後日本のメディア・イベント』世界思想社、2002)

小野耕世「思い出の『原子力時代』」『インテリジェンス』11号、2011

藤田祐幸『原発と原爆の間』(本の泉社、2011)

藤田祐幸「日本の原子力政策の軍事的側面」(2004年日本物理学会第59回年次大会社会的責任シンポジウム「現代の戦争と物理学者の倫理とは」報告)

藤田祐幸「戦後日本の核政策史」(槌田敦・藤田他『隠して核武装する日本』影書房、2007)

<http://www.asyura2.com/0403/genpatu2/msg/248.html>

ジェラス・ゲイ「日本の核武装化をめぐる動き」

http://homepage.mac.com/ehara_gen/jealous_gav/nuclear_armament.html

有馬哲夫『原発・正力・CIA：機密文書で読む昭和裏面史』(新潮新書、2008)

有馬哲夫『日本テレビとCIA 発掘された「正力ファイル」』(新潮社、2006)

佐野眞一『巨怪伝：正力松太郎と影武者たちの一世紀』上下、文春文庫、2000 (初版1994)

柴田秀利『戦後マスコミ回遊記』(中公文庫)

中曾根康弘『政治と人生—中曾根康弘回顧録』(講談社、1992)

中曾根康弘「ジュネーブ国際会議から50年：我が国の原子力平和利用は」

http://www.jaero.or.jp/data/02topic/gensiryokukou_42sympo.html

『岸信介回顧録』(廣済堂、1983)

春名幹男「原爆から原発へ—マンハッタン計画という淵源」(『世界』2011.6)

「伏見康治記念ページ」<http://viva-ars.com/bunko/husimikinen/>

伏見康治「時代の証言—原子科学者の昭和史」(同文書院、1989)

<http://viva-ars.com/bunko/fushimi/hushimi-1.pdf>

伏見康治・中曾根康弘対談「黎明期の原発」(『原子力文化』1998.7)

<http://viva-ars.com/bunko/fushimi/fushimi-2.html>

現代史スクープドキュメントNHK「原発導入のシナリオ ～冷戦下の対日原子力戦略」1994

<http://video.google.com/videoplay?docid=-584388328765617134#>

原子力委員会『原子力開発30年史』（日本原子力文化振興財団、1976）

日本原子力産業会議編『原子力は、いま 平和利用30年』上下（丸の内出版、1986）

科学技術庁原子力局「原子力白書」「日本原子力委員会月報」

<http://www.aec.go.jp/jicst/NC/about/hakusho/index.htm>

<http://www.aec.go.jp/jicst/NC/about/ugoki/geppou/geppou.html>

核情報「日米安保関連略年表・リンク集」（1969「わが国の外交政策大綱」など所収）

http://kakujo.net/ndata/us_jp.html

The Cold War Science & Technology（カーネギーメロン大学、特にBibliographies 参照）

<http://www.cmu.edu/coldwar/>

原研事務局・菅田清治郎『原子力諸法案の生れるまで』1966

一本松珠磯『東海原子力発電所物語』（東洋経済新報社、1971）

道下徳成「日本の防衛政策・自衛隊に関するヒストリオグラフィー」戦略研究学会『年報 戦略研究（日本流の戦争方法）』第5号、2007

http://researchmap.jp/index.php?action=multidatabase_action_main_filedownload&download_flag=1&upload_id=6801&metadata_id=20710

Atoms For Peace - Digital Documents and Photographs Project

[http://www.eisenhower.archives.gov/research/digital_documents/Atoms For Peace/Atoms For Peace.html](http://www.eisenhower.archives.gov/research/digital_documents/Atoms%20For%20Peace/Atoms%20For%20Peace.html)

<http://aboutusa.japan.usembassy.gov/j/jusa-j-major-docs-peace.html>

Richard G. Hewlett/Jack M. Holl, *Atoms for Peace and War 1953-1961: Eisenhower and the Atomic Energy Commission* (California Studies in the History of Science) Univ of California Pr (1989/07)

Martin J. Medhurst, "Atoms for Peace and Nuclear Hegemony: The Rhetorical Structure of a Cold War Campaign," *Armed Forces and Society*, 23(1997): 571-593. (in, MARTIN J. MEDHURST, *Cold War Rhetoric: Strategy, Metaphor, and Ideology*, Michigan State Univ Pr; Rev Sub 版 (1997/11)

Shawn J. Parry - Giles, DWIGHT D. EISENHOWER, "ATOMS FOR PEACE" (8 DECEMBER 1953) *Voices of Democracy* 1 (2006): 118 - 129

<http://umvod.files.wordpress.com/2010/08/parry-giles-eisenhower.pdf>

<http://archive.vod.umd.edu/internat/deafpcon.htm>

Ira Chernus, *Eisenhower's atoms for peace*, Texas A&M University Press, 2002

Peter Pringle, *The Nuclear Barons*, Henry Holt & Co (1981/09)

John Krieg, *American Hegemony and the Postwar Reconstruction of Science in Europe*, The MIT press, 2008

Kai-henrik Barth & John Krige, *Global Power Knowledge: Science and Technology in International Affairs*, Chicago UP, 2006

Hewlett, Richard G. and Holl, Jack M. (1989). *Atoms for Peace and War 1953-1961: Eisenhower and the Atomic Energy Commission*, University of California Press.

Reinhard Zllner, Japan. Fukushima. Und wir, Iudicium Verlag 2011

Daniel Wit, The United States and Japanese Atomic Power Development, *World Politics*, No.4, July 1956,

John D Moia, Atoms for Sale? Cold War Institution-Building and the South Korean Atomic Energy Project, 1945-1965, *Technology and Culture*, Vol.51, July 2010.

外務省情報文化局第四課『各国原子力問題の調査報』1954

外務省国際協力局第三課『各国における原子力平和利用の現状』1955.

外務省国際協力局第三課『各国原子力情報 第一号』1955-62?

外務省アメリカ局安全保障課『原子力時代の外交と国防』1962. 4
総理府原子力局編『各国原子力法の概要』(経団連、1956)
科学技術庁資源局『世界のエネルギー需給と原子力の役割』1956. 10. 1
朝日新聞調査研究室報告『原子力の利用と展望』1957. 2. 15
国際調査社公安調査室編『自由・共産両陣営及び中立国における原子力の開発、利用並びに保有状況』(国際調査社、1957)

Reinhard Zoellner, Japan, Fukushima und Wir, IUDICIUM, Muenchen 2011
Johannes Hano, Das japanische Disaster: Fukushima und die Folgen, Herder, Freiburg 2011
Daniel de Roulet, Fukushima mon amour: Brief an eine japanische Freundin, Hoffman und Campe, Hamburg 2011
Peter Jaeggi, Tschernobyl fuer immer: Von den Atombombenversuchen im Pazifiku bis zum Super-GAU in Fukushima, Ein Lesebuch, Lenos Verlag 2011
エコノミスト『戦後産業史への証言3 エネルギー革命』(毎日新聞社、1978)
橘川武郎「日本の原子力発電」(『一橋商学論叢』3 (1)、2008)
橘川武郎『日本電力業発展のダイナミズム』(名古屋大学出版会、2004)
川上幸一『原子力の政治経済学』(平凡社、1974)
室田武『原子力の経済学』(日本評論社、1981)

坂本義和編『核と人間』I・II (岩波書店、1999) 坂本「近代としての核時代」長谷川公一「原子力発電をめぐる日本の政治・経済・社会」

日本国際政治学会『国際政治』163号「核とアメリカの平和」友次晋介「アジア原子力センター構想とその挫折」
宮嶋信夫編『原発大国へ向かうアジア』(平原社、1996)
金子熊夫『日本の核、アジアの核』(朝日新聞、1997)
吉村慎太郎・飯塚央子編『核拡散問題とアジア：核抑止論を超えて』(国際書店、2009) 布川弘「核拡散と日本」
相楽希美「日本の原子力政策の変遷と国際政策協調に関する歴史的考察：東アジア地域の原子力発電導入へのインプリケーション」(経産省RIETI Policy Discussion Paper Series 09-P-002, 2009)、
<http://www.rieti.go.jp/jp/projects/prd/abra-b/07.html>

2010 NHK スペシャル「核を求めた日本」<http://vimeo.com/23185260>
<http://www.youtube.com/watch?v=3aFP8EIIYAkU>
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kaku_hokoku/index.html

前田寿『原子力の国際政治』(岩波新書、1958)
下斗米伸夫『アジア冷戦史』(中公新書、2004)
下斗米伸夫『日本冷戦史』(岩波書店、2011)
市川浩『科学技術大国ソ連の興亡』(勁草書房、1996)
市川浩『冷戦と科学技術』(ミネルヴァ書房、2007)
D・ホロウェイ『スターリンと原爆』上下(大月書店、1997)
NHK取材班『旧ソ連 戦慄の核実験』(NHK出版、1994)
ヘインズ＝クレア『ヴェノナ』(PHP研究所、2010)
ノーマン・モス『原爆を盗んだ男 クラウス・フックス』(朝日新聞社、1989)
ニコラス・ダヴィドフ『大リーガーはスパイだった モー・バーグの謎の生涯』(平凡社、1995)

占領期「原子力」報道 (10/15 第63回研究会報告「占領下日本の「原子力」イメージ ――ヒロシマからフクシマへの助走」)

<http://members.jcom.home.ne.jp/katote/Occuatom.html>

<http://mainichi.jp/enta/art/news/20111102dde018040044000c.html>

「占領期の原爆報道消滅神話」 1945年9月21日GHQ「プレスコード」検閲以降

「原子力問題についての検閲はきびしく、もちろん広島、長崎の有様、原爆の残虐性など書くことは許されなかった時代」(武谷三男『続・弁証法の諸問題』1955「はしがき」、著作集1, p.176)

「占領が終わるまでは、マス・メディアによる原爆に関する報道は一切姿を消す」(袖井林二郎『原爆から原発まで』アグネ、1975)

「原爆報道をやろうと思えばできた時代だ」が「原爆報道はあまりなかった」(朝日記者岩垂弘1975)

「原爆が書けないことは記者のだれもが知っていた」(朝日「原発とメディア：『平和利用』への道⑥」2011/10/11 夕刊)

プランゲ文庫「原爆・原子力」雑誌・新聞見出し・小見出し・リード登場頻度

・「原子」4349件 (1945年44件) Atom8813 「原爆」1385 「原子爆弾」1474 「ピカドン」90 「原子戦争」19
・「原子力」1593件 「原子力時代」117 「アトム」288 「ノーモア・ヒロシマ」20 「原子エネルギー」63
「原子力の平和的利用」14 「原子力の平和利用」3 「放射能」219 「原子病」74 「原爆症」101 「ウラン」539

論点1 原爆報道は少なかったか(朝日新聞10/11)、意外に多かったか(毎日新聞11/2)?

- ①「原子」4349件(1945年44件)＝巨大星雲「科学」「文化」のなかの小星雲?
- ②「原爆」1385 「原子爆弾」1474 「原子力」1594件の意味? 吉田茂なみ?
- ③「アトム」288 「ピカドン」90 「放射能」219―「奴隷の言葉」の抵抗だったか?

「原子力」1593件の分析

<http://members.jcom.home.ne.jp/katote/Occuatom.html>

1945―早くも「原子力の夢」が現れる

1946―国連・米ソ国際管理に期待し、仁科博士らが基礎理論提供して、台風制御・食糧増産・医学的应用など「平和的利用の夢」拡大

1947―「原子力時代」の科学立国・文化国家建設に武谷三男らの理論的基礎付け

1948―「平和国家」と「原子力平和利用」がオーバーラップ

1949―ソ連の原爆保有で左翼も「闘う原子力」積極支持、こども・教育へも波及、放射線の晩発被害は隠蔽され続ける

「ピカドン」90件＝46.2の新語から世界語へ、中国新聞の突出した使用、49年には薬やこども漫画に
「アトム」288件＝「鉄腕アトム」(1951「アトム大使」)以前に膨大な使用例。労組機関紙、漫画・子供向けも。広島・長崎をは中性化し「アトム都市」に

「放射能」219件＝晩発被害が検閲で隠されたもとの、効用も語られ、療養所機関誌名にも

ことばの周辺

ヒロシマからフクシマへ

文化

10月中旬、東京の早稲田大で行われた20世紀メディア研究所(山本武利代表)の公開研究会で、加藤哲郎・同大教授(政治学)の発表を興味深く聴いた。テーマは「占領下日本の『原子力』イメージ―ヒロシマからフクシマへの助走」である。加藤さんによると、広島に原爆が投下された1945年8月6日の翌日から、敗戦後、連合国軍総司令部(GHQ)が情報統制に乗り出す9月21日までの「原爆報道」に関する研究はあったが、以後の時期についてはほとんどない。52年の占領終結まで原爆は報道されなかったとよくいわれるが、加藤さんはこれを「神話」とする。

今回調べたのは、占領期にGHQの検閲対象となった国内出版物のコレクション「プランゲ文庫」の資料。加藤さんがデータベースで「原子爆弾」「原子力」を検索したところ、それぞれ約1500件がヒットした。

被爆地の『中国新聞』(本社・広島市)の場合、164件の「原子爆弾」のうち「機関車に原子力

アメリカ批判を書いたものは厳しく制限されたが、「原爆」記事そのものは検閲制度があった49年までの間、意外に多く掲載されていたという。「原子力」を扱ったところ、それぞれ約1500件がヒットした。

藤さんが挙げた豊富な例によれば、早くも45年のうちに「機関車に原子力

は人類の破滅」(『週刊東洋経済』48年4月24日)といった危惧も示されたものの、総じて「原子力」は「隔絶した威力のあるものとして、敗戦・復興期の日本人の夢だった。毎日新聞を含む全国紙も例外ではない。そして50年代半ばには、原水爆禁止運動ととも

原子力の両義性、占領期に起点

記事があり、うち半数を超える94件が検閲を受けたが、その8割は外電記事だった。他の新聞・雑誌を含め、放射能被害や

一方、「原子力戦争

「科学世界」と(原子力発電を含む)が

「現在我々の抱えている最重要課題のひとつは、エネルギー問題の解決……とくに原子力発電に代わる安全でクリーンな新しいエネルギー源を開発実現化することである」

3月の事故以来、「原子力」に関する議論は熱を帯びている。この間、さまざま「ことば」が語られてきたが、最近印象に残ったものを二つ、紹介してみた。

第二次余剰農産物受入れ

新聞は世界平和の原子力

1955年の新聞週間標語は「新聞は世界平和の原子力」。これは当時の「原子力」イメージをよく示している。同年10月1日の毎日新聞朝刊1面

「大井浩一」 毎月一回掲載します

占領下日本の情報空間—プランゲ文庫 250 万雑誌・新聞記事のキーワード星雲マップ
加藤哲郎作成試行版（1 万件以上ゴチック、1 万-5 千下線、強調=注目）計量分析入門

以下は、20 世紀メディア研究所第 65 回研究会 2011 年 12 月 17 日午後 2 時 30 分～午後 5 時 ・ 場所 早稲田大学 早稲田キャンパス 1 号館 3 1 0 号教室で報告するので、同時代史学会報告では資料提示のみ

占領期日本の言説空間——プランゲ文庫のキーワード・クラウド

加藤哲郎（早稲田大学）

東京 1147114 日本 932426 大阪 126168 広島 125598 北海道 30108 福島 22400
沖縄 1278 ワシントン 19931 ロンドン 8014 ニューヨーク 7809 上海 3651 ベルリン 4578 モスクワ 2900
サンフランシスコ 1301 北京 599 ハワイ 1058 江戸 13397 Tokyo 13722
銀座 105576 新宿 46202 国分寺 556 早稲田 3031 慶応 2974 故郷 2220 ふるさと 2658
世界 15874 国際 35825 地球 9428 宇宙 1760 国連 4987 世界国家 418 Global 12
アメリカ 30329 米国 20238 ソ連 13141 ソ同盟 176 ソビエト 742 ドイツ 8361 フランス 6467 イタリア 1753
スイス 1070 ギリシャ 826 スウェーデン 148 反米 53 親米 18 USA 6318
中国 115073 中共 9726 中華 1769 支那 977 朝鮮 5853 満蒙 75 内地 965 外地 2374
情報 27765 占領 7734 検閲 4070 言論 5724 データ 1112 諜報 53 ニュース 38341 報道 4559 メディア
33 media 3536 ジャーナリズム 10074 Journalism 71 マスコミ 0 世論 7333 輿論 2479 世論調査 978
communication 525 インテリジェンス 18 Intelligence 164
新聞 873151 雑誌 126384 出版 138687 映画 68534 ラジオ 10482 電話 4981 テレビ 674 実話 4886 真相
4258 スパイ 1529 宣伝 6810 扇動 112 広告 5340 newspaper 32
民主主義 6900 社会主義 2202 共産主義 1706 資本主義 1467 自由主義 542 全体主義 107（文部省統計数理
研「日本人の国民性」調査の「6つの主義」、1953-、2008 第 12 次）
民主 31727 自由 29650 平等 804 対等 97 友愛 1048 博愛 1036 戦後民主主義 2
文化 194821 文明 1616 自然 9599 人間 8330 環境 2108 生態系 1 競争 2211 culture 5918
科学 401010 科学者 2218 技術 38948 技術者 1675 方法 18900 法則 727 原理 1919 science 11427
構造 4274 機能 2115 本質 1886 現象 2159 実体 871 理論 4589 実践 2475
歴史 134353 伝統 1422 現代 8906 近代 9569 モダン 3587 近代化 362 近代主義 34
日本史 346 世界史 235 国史 339 国文 14526 国学 809 神話 356 開国 106 維新 278
天皇 5464 陛下 3330 天皇制 688 皇室 392 行幸 566 皇国 24 共同体 73 逆コース 7
明治 6800 大正 3525 昭和 40351 元号 2 西暦 37 暦 2378 絶対主義 77 modern 1632
平和 12839 戦後 10433 戦争 9307 終戦 5888 敗戦 2144 冷戦 36 大戦 1227
太平洋戦争 274 大東亜戦争 46 終戦 5888 敗戦 2144 満州 1742（満州事変 79）日中戦争 0 軍 49178 軍部
465 軍隊 622 戦車 116 毒ガス 57 戦犯 13105 ファシズム 286 ナチス 148
帝国 17275 帝国主義 188 植民地 426 南方 398 領土 307 移民 491 亡命 266 報国 385
占領 7734 占領軍 2529 進駐 1848 進駐軍 1530 賠償 3958 講和 3239 occupation 72
引揚 18312 復員 4730 帰還 1785 抑留 1094 法 323080 所有 36203 憲法 29327 契約 3207 新憲法 3163 日本
国憲法 232 主権 504 人権 23275 普通選挙 9 黒人 144 白人 72
格差 447 差別 396 部落 3304 constitution 863 Emperor 282 GHQ 852 WHO 1076
国家 43289 民族 2327 ナショナル 1651 権力 421 暴力 1503 実力 1846 権威 1583

愛国 388 祖国 1042 国粋 21 墮落 197 独裁 445 殉国 3 national 5813 Unesco 639
 宗教 54511 仏教 3697 キリスト 2825 マリア 640 神道 3081 唯物論 356 観念論 81
 無神論 32 イスラム 20 悔恨 90 無念 106 独善 166 英雄 2341 罪惡 131 自虐 43 遺恨 37
 哲学 54071 人生 30884 知性 804 主体 1236 主体性 365 ヒューマニズム 521 価値 3168
 思想 18504 肉体 1742 精神 6867 革命 4264 解放 3976 地位 2730 業績 1877 自己 2087
 復興 18169 復活 5207 再建 10768 発展 5639 開拓 4901 開発 3308 所得 4198 資産 2796
 農地改革 1998 封建 1734 封建制 372 財閥解体 125 男女平等 82 相続 487 samurai 75
 国民 34839 人民 9480 市民 8324 大衆 7423 民衆 3020 階級 2365 庶民 1041 市民権 64
 労働 238311 労働者 7675 プロレタリア 334 資本家 611 ブルジョア 200 無産 118 ILO 2694
 産業 47074 工業 142333 農業 49473 農民 7640 農協 7767 資本 5678 投資 5904
 経営 31328 経営者 3415 商品 3968 利益 1317 利潤 301 利子 811 business 152 manager 413
 会社 489563 職場 43128 工場 39683 商店 8414 エコノミー 5 占拠 168
 夢 16278 希望 12824 期待 6858 正義 3798 失業 4494 搾取 297 貧 3057 飢 1491
 倫理 8430 道徳 1407 世間 990 人情 1023 幻想 871 自殺 2676 盗 15525 治安 1252
 青年 191320 若者 311 婦人 65084 女性 17680 官僚 1513 公務員 38184 公職 1554
 社会 299545 政治 126338 経済 192646 生活 55532 生産 33101 企業 26809 society 2836
 衣 13748 食 50802 住 102712 生産者 1524 消費 6275 消費者 2704 団地 83 長屋 329
 教育 149665 学校 167833 教科書 5397 大学 112805 学生 20354 学歴 215 関 1109 academic 98
 家 158882 家庭 21426 家族 4872 貴族 911 華族 93 結婚 32383 恋愛 3947 愛 114678 恋 13010 焼け跡 27 闇市
 315 買い出し 21 嫁 2297 成人 882 成年 586 元服 16 還暦 430
 新年 5031 年賀 243 正月 3467 クリスマス 1495 忘年会 67 入学 2296 卒業 3466
 発明 46654 発見 6587 特許 46400 著作権 167 国際通貨基金 181 IMF 17 世界銀行 10 licence 1734
 電気 40224 電力 7320 国鉄 29449 石炭 11048 石油 4401 Atom 8813 nuclear 68
 進歩 3091 反動 932 保守 2904 革新 3712 左翼 469 右翼 349 左派 1186 右派 345
 講座派 5 労農派 27 民科 1043 学術会議 856 文化人 1423 left 56 right 2595
 インテリ 467 知識人 371 論壇 1143 医者 860 弁護士 1297 社長 7077 Intellectual 33
 共産党 9975 社会党 8754 民主党 5422 自由党 2649 前衛 1296 統一戦線 219 労農同盟 2
 同志 8513 人民戦線 819 人民民主主義 80 反共 1947 容共 95 綱領 885 戦略 624 戦術 1624
 賃金 42094 工場 39683 職場 43128 議会 42019 選挙 19956 国会 11561 投票 4943
 労働組合 119259 スト 53804 デモ 19615 メーデー 1265 酒場 190 union 5219 strike 179
 スポーツ 27193 体育 11336 野球 32530 相撲 2722 水泳 2249 柔道 1959 剣道 143 サッカー 198 オリンピック
 1260 ベースボール 4424 高校野球 1793 花火 903 ダンス (含むダンス) 5289
 読書 18381 音楽 55620 英語 15263 レコード 2561 落語 713 浪曲 494 ジャズ 771
 台風 4318 地震 2253 津波 102 天気 2708 天気予報 373 earthquake 33 baseball 4304
 文学 357370 文学者 1163 小説 99446 小説家 220 文士 115 詩 61559 詩人 10040 俳句 59538 短歌 56465
 川柳 19112 芸術 178310 芸術家 564 美術 12888 美術家 223 画家 1495 映像 128 絵画 37693 彫刻 2389
 写真 52866 アート 2325 芸能 16092 芸能人 155 古典 1111 クラシック 10 万葉集 680 源氏物語 198 徒
 然草 172 好色 399 エロ 1603 グロ (含むクロ) 9862 ナンセンス 191 ブギウギ 327 美人 1443 ミス 9810 童話
 3543 おとぎばなし 27 桃太郎 124 スター 12051 (含むスターリン) 歌舞伎 2474 kabuki 29

論点2 この星雲から何を読み取れるか？

(ウェイト化・ポイント化、複数キーワード掛け合わせによる相関係数、回帰分析等省略)

論点3 原子力に関わった人々のメディア露出度は高いか低いかな？

湯川秀樹（初代原子力委員会委員）134 武谷三男 128 渡辺慧（原子党宣言）88
仁科芳雄 68 崎川範行 62 嗟峨根遼吉（長岡半太郎5男）37 藤岡由夫（初代原子力委員）37 田中慎次郎
（朝日）32 伏見康治 30 長岡半太郎（日本学士院長）23 坂田昌一 17
朝永振一郎 14 茅誠司 14 武田栄一 13

トルーマン 4029 マッカーサー 3917 蒋介石 542 チャーチル 300 リンカーン 251 ル（ロ）ーズベルト 105 アイ
ゼンハワー 83 ガンジー 370 孫文 79 スターリン 1274 毛沢東 472
ホイットニー 190 ケーディス 54 フェラーズ 30 ウィロビー 9
和田博雄 1428 吉田茂 1422 石橋湛山 1235 芦田均 1228 片山哲 1200 森戸辰男 509
幣原喜重郎 448 加藤勘十 279 西尾末広 248 鈴木茂三郎 231 東条英機 98 浅沼稻次郎 81
鳩山一郎 64 **正力松太郎 35** 勝間田清一 34 **中曾根康弘 30** 重光葵 12 白洲次郎 9
徳田球一 278 野坂参三 254 山川均 159 伊藤律 127 志賀義雄 114 宮本顕治 76

カント（含む缶と）3513 ゲーテ 948 ノーベル 368 ニュートン 352 プラトン 163 ケインズ 152 アインシュタイン
138 ウェーバー 113 エジソン 78 ガリレオ 76 ヘーゲル 74 ベートーベン 74 ニーチェ 48 キュリー夫人 46 ヘ
ミングウェイ 32 オッペンハイマー 16 ハイエク 9 ハイゼンベルグ 5
家康 77 秀吉 412 信長 46 竜馬 43 西郷 539 芭蕉 1287 一茶 440 尊氏 17
西条八十 1583 原節子 618 高峰秀子 569 **太宰治 542** 武者小路実篤 537 田村泰次郎 535 佐多稲子 517 林房
雄 489 高峰三枝子 472 長谷川一夫 434 山岡荘八 399 大佛次郎 391 菊池寛 390 **田中耕太郎 381** 東郷青児
380 賀川豊彦 372 **安倍能成 361** 石坂洋次郎 356 村山知義 347 川端康成 345 島崎藤村 336 中野好夫 328
平林たい子 306 **大山郁夫 301** 中島健蔵 293 坂口安吾 282 佐藤春夫 279 青野季吉 250 石川達三 249 藤
森成吉 246 久米正雄 244 笠置シズ子 243 志賀直哉 225 中山伊知郎 212 林秀雄 212 大河内一男 212 横田喜三
郎 195 谷崎潤一郎 192 亀井勝一郎 190 福田恆存 171 鈴木大拙 178 黒沢明 169 長谷川如是閑 164 岩淵辰雄
164 今井正 161 天野貞祐 159 中谷宇吉郎 155 芥川龍之介 148 長与善郎 137 永井荷風 137 鈴木安蔵 136 **都
留重人 134 清水幾太郎 134** 土門拳 134 小林秀雄 134 藤山一郎 129 三島由紀夫 129 宮沢俊義 129 桑原
武夫 127 三木清 125 高桑純夫 120 蠟山政道 116 山本有三 108 花田清輝 99 土井晩翠 98 竹山道雄 94 臼井
吉見 92 山田耕筰 92 矢部貞治 91 谷川徹三 86 宮城音弥 86 大熊信行 86 田辺元 85 宗像誠也 85 南博 85 林
達夫 84 森鷗外 81 林健太郎 80 大宅壮一 76 美濃部達吉 74 **丸山真男 65** 高野岩三郎 63
佐田啓二 63 **鶴見俊輔 60** 千田是也 58 宮原誠一 56 鶴見和子 55 和辻哲郎 53 津田左右吉 50 高木八尺 48
新村猛 46 笠信太郎 45 西田幾多郎 44 高坂正顕 42 大塚久雄 40 猪木正道 40 中井正一 39 高島善哉 38 今東
光 35 東海林太郎 34 浅野晃 31 高山岩男 30 日高六郎 27 上原専禄 27 緒方竹虎 25 前田多門 22 吉本隆明 22
吉野源三郎 21 久野収 16 保田與重郎 16 美空ひばり 15（ひばり 573） 田宮博 8

論点4 マルクス主義は時代に「大きな影響」を与えたか？

井上清（含む同姓同名/清一等）496 宮本百合子 317 **平野義太郎 260** 徳永直 266 福島要一 188 羽仁五郎
178 中野重治 168 **大内兵衛 167** 向坂逸郎 154 国分一太郎 133 柳田謙十郎 112 鹿地亘 111 荒畑寒村 107
小林多喜二 102 有澤広巳 94 服部之総 82 松村一人 62 堀江邑一 58 古在由重 53 宇野弘蔵 45 戸坂潤 43
石母田正 35 守屋典郎 34 石井金之助 25 遠山茂樹 25 片山潜 30 堺利彦 21 大塚金之助 10 野呂栄太郎 9 山
田盛太郎 7 **マルクス 842 レーニン 393 エンゲルス 134 communism 41 Marx 10 Lenin 3529 Stalin
2511** マルクス主義 202 唯物論 356 弁証法 305 独占資本 254 土台 129 上部構造 5 マルクス・レーニン
主義 37 スターリン主義 16 全般的危機 5 Marxism 5 生産力 621 生産関係 111 生産様式 38 イデオロギ
ー 280 Ideology 26

論点5 「悔恨共同体」対「無念共同体」で占領期の知識人世界は尽くせるか？（竹内洋『革新幻想の戦後史』）

1章 悔恨共同体と無念共同体



図1-4 敗戦にともなう感情

敗戦感情の四類型

そこで、敗戦後の感情（共同体）の複数性に鑑みて、とりあえず敗戦をめぐる複数の感情（共同体）を図1-4のように整理することができよう。むしろここでは、敗戦とともに命あつての物種とばかり物資の買ひあさりなどに走った生活リズムにもとづく感情は除外している。あくまで敗戦という非常時への知的反応に限定した類型である。

横軸は「即自」^{ア・シツジ}、つまり敗戦という出来事それ自体に即応した精神状態と、「対自」^{フエツジツヒ}、つまり敗戦を契機とした反省と再生の精神状態の区別である。縦軸は戦争を含めた戦前日本を完全否定する

た。日本の敗北こそが解放と自由だった。そういう丸山にしてみれば、敗戦で「爽快な風が頭のなかをふきぬけた」ように感じ、「悲しそうな顔をしなければいけないのは辛いね」という同僚兵士の言葉に「よく言ってくれた」と言ったのは、いつわらざる感情吐露ではあつたろう。しかし敗戦をめぐる感情には丸山と一般国民の間にはかなりの距離があつたことは確かである。

であるから、丸山の敗戦後の知識人の悔恨共同体論は、敗戦感情の複数性への目配りが欠けている。それどころか、戦闘体験をもたない戦後派は敗戦感情を言説によって知る以外にないから、そうした世代の読者に、敗戦感情の複数性を見えなくさせる遮蔽幕効果をもたらした。

敗戦直後の世論調査に明らかである。敗戦直後の「日本が降伏したと聞いた時、どのように感じたか？」という質問の回答では「残念・悲歎・失望」三〇%、「驚き・衝撃・当惑」二二%、「安堵感・幸福感」二二%、「占領下の危惧・心配」一三%、「幻滅・苦さ・空虚感など」一三%、「恥ずかしさとそれに続く安心感など」一〇%、「予期していた、など」四%、「天皇陛下に申し訳ない、など」四%、「回答なし、ほか」六%（合衆国戦略爆撃調査団『日本人の戦意に与えた戦略爆撃の効果』）である。「残念・悲歎・失望」と「驚き・衝撃・当惑」が多数を占めている。

戦中を「暗い谷間」どころか「恐怖」で生きた丸山に即して見れば、敗戦は、国体からの解放だっ